

く海岸の風光が美しく眺められる。じつと其れに見取れてゐると、人間もかくして物を見てゐるのじやないかと思へて来る。丸い眼球に丸い瞳孔が開いてゐる。其れで外界を眺めてゐるのだから、外界が一つの圓の中に映されてゆかぬばならぬ。さうしたことが人が圓に特種な關心を持つ一つの理由じやあるまいかとも思へる。

我々が外界を見る時は、外界の事象を其の儘直接に見ることが出来ない。其處には何程かの空間が必要である。其の空間の間隔なくしては物を見る事が出来ない。其處に我々は圓を眺める時に空と云ふ一つの感じを持つのじやあるまいか。

數字の零が數の不在を示すことは云ふ迄もないが、圓を眺めると何かしら空虚な無と云ふ感じを味はふことが出来る。四角や三角があつて、其の中が空虚であつても、何か知ら圓が尤も空虚の意味を明確に示すやうに考へられる。試

験の答案が書けぬ場合に御丁寧に丸を書くのは、さうした心理に支配せられるからであらう。

丸い瞳孔を通じて外界を見る時何が其處に存在する。山があつたり家があつたり海があつたり、船があつたりする。空を眺めてさへ其處に蒼い色があつたり、白い雲があつたりする。太陽や月や星があることは勿論である。一切の事象が丸い瞳孔を通じて眼に入つて来る。現象されたものは見えぬものはない。人の心の動きでさへ眼を通じて心に感ぜられて来る。

圓を眺めると圓滿具足と云ふ感じを次ぎに味はふのは其のためじやあるまいか。一切のものが充實して餘りがない心を感じしめる。満月を眺めると満願眞如の面影が偲ばれて来る。丸く肥つた顔を見ると圓滿長者のやうな人格を考へる。丸い錢を眺めると如何なる慾望も其れで充し得ると北叟笑むも強ち悪いとは云へないだらう。

我々が丸い瞳孔を通じて眺める物は、すべて動いてゐる。動かぬものは一つもない。其れが空間的にか時間的にか其の執れにしても動かぬものは一つもない。雲は空間的に動きつつある。山は時間的に動きつつある。人は時間的にも空間的にも動いてゐる。

圓が運動の感じを與へ、生命の感じを與へるのは其のためじやなからうか。空間的の動きの場合に運動を偲ばせ、時間的の動きに生命を感じしむる。勿論兩方を通じて生命を思はしめるが、二つに分けて見れば其のやうに考へていいであらう。

圓轉滑脱と云ふ言葉は、圓の運動を示してゐる。圓が運動を象徴するのは車輪の圓からのみ想像する必要はない。汽船のスクリューや飛行器のプロペラもやはり圓の運動によつてゐるし、鳥や蜻蛉の羽の運動も圓の運動の何程かを爲してゐる。人や獸が走る時にさへ、あの脚の運動は車の輻の運動を無限に、平

にされた輪の上に行なつてゐるに過ぎない。

生命が靈魂として圓の形に示されるのは、明かに、圓が生命を示すことを裏書する。鏡餅が靈或は生命の象徴だと云ふのは牽強附會の説ではない。圓鏡が神靈を示すと云ふことは洵に當然であると云はなければならぬ。

かう考へて來ると圓がもつ不思議な意味に驚かざるを得ない。其れが空を示し、有を示し生命を表現する。空と有と生命、しかし其れだけで一切のものが總括せられると考へて來ると益々其の意味の廣大無邊なるに吃驚する。

或時陳操就書が資福和尚に參じたことがあつた。其の時、和尚は陳操の來るのを目聰く見付けて、早速陳操に向つて手で圓を描いて見せた。ところが陳操もさるものである。陸州和尚の門に鍛へられただけあつて驚きもせない。

「私がここへ參りますことが已に其の本分の面目に叛いてゐるのに、和尚は其の私に圓を描いて見せるなんか、ちと何うかしてゐますね」

と、平氣である。そこで和尚は、卽座に方丈の門をピシヤリと閉めてしまつた。道の陳操もかうなつては動きが取れなくなつた。ここで知れるのだが、陳操は一隻眼のみを有して兩眼は開いてゐなかつたのだ。

資福和尚が描いた圓は唯の圓ではなかつた。明晃々たる寶珠であつた。八面玲瓏の玉であつた。眞如であり法性であり、本來の面目であつた。しかも其れは森羅萬象の實相である。見る限りに遍滿してゐる。前後左右にころがつてゐる。馬に載せ船に積んでも積み切れぬ。其れを陳操は遠慮深くも受取らなかつたのである。氣の毒な彼である。

彼れが受取らなければ眞に其れを受取る人に附與していい。眞に其れを受取ることが出来る人を釣るためには、資福和尚のこの圓は實に恰好のものでなくてはならぬ。しかし、和尚のやうな手強い人に、この圓を描かれては、一人陳操のみではない、誰だつて其の畏を遁れることは出来得ない。

眞に菩薩道を行くもののみが、其の圓の生活を得ることが出来るであらう。學問や知識や地位や金や、さうした角々しい根性では、圓の生活の廣大無邊な味を永遠に嘗め得ないが、せめて世間の生活があつた角々しい角を取つて呉れたら、何んなに世間が住みよくなるであらう。

三四、超 人 (仰山問僧)

ここで超人と云ふのは、仙人を云ふのではない。人間臭さを離れずに人間臭さを持つてゐぬ人を云ふのである。可笑な云分ではあるが圓の生活人を指すのである。知識や學問や地位や金や力を持つてゐながら、其れに眼をかけぬ人と云ふのである。大いなる自然の風光を背景として、小さな人間生活に頓着せぬ屈托のない人を云ふのである。

と云つて人間生活を顧ぬ人と云ふのではない。人間生活の苦や樂を具に嘗めながら、しかも其の苦や樂を苦や樂とせぬ人を云ふのである。苦や樂を誤魔化するのではない。見て見ぬ振りをするのでもない。臭いものに蓋をするのでもない。苦を苦と開き、樂を樂と開く人を云ふのである。苦に徹し、樂に徹し、人間に徹して、人間を忘れた人を云ふのである。

世間では明朗な人と云ふ聲を聞く。明朗な人は明朗な心を持つた人でなくてはならないが、明朗な心は如何にして現はれて来るか。眞に明朗な心は、世間にあつて世間を忘れるところから生れて来る。

世間知らずの坊ちゃんにもさうした心はある。其れは童魂を失つてゐないからであらうが、しかし其れはやがて曇り易い。人々の苦樂を経て後の聖心として現はれた明朗性は、最早牢平として崩れ難いものであるが、其れは世にあつて世を忘れるところには生れて来る。かかる聖心の持主こそここで云ふ超人である。

ある。

仰山和尚の如きは洵に超人の典型と云つていい。何となく好々爺と云つたやうなところがあつて、明朗で春日遅々と云ふやうな懐しみ暖みが其の人格に燦々としてゐる。臨濟や徳山と云つたやうな峻嚴な和尚は、秋霜烈日で、神仙と云ふやうな感じを伴ふが、超人と云ふ感じは少しも現れて來ない。

和尚が新參の雲水に問ふたことがある。

「おまへは何處かうやつて來たな」

と云つて其の雲水は、

「廬山から參りました」

と答へる。そこで和尚は、

「廬山に居たのなら有名な五老峯を見たらうな」

「いえ、薩張存じません」

「それじゃお前は少しも山へ遊んだことがないのかな」と愚問愚答を重ねてゐる。初見參の雲水をつかまへて、かくも優しい。禪門の峻烈な風事は爪の垢ほどもない。しかしこれは決して愚問愚答ではない。雲門和尚も云つてゐるやうに、これこそ仰山和尚の正味の愛の心が現はれてゐる處である。

和尚が雲納を接化するには種々の方法があらうが、今ここでは其の詮索は不用である。誰あつて仰山和尚の接化の方法を云爲することが出来ようか。其れ等の方法の上に超越する偉大なる人格を望むべきである。白雲鬢鬚として茫漠たる處もあれば、朝暾澄明にして微に入り細を穿つまで透すこともある。左顧すれば玲瓏玉の如く、右眇すれば愚昧の好々爺の面影がある。

彼の寒山子が寒山に居をしめて、山を自己の住居として自由に振舞、山か寒山子か、寒山子か山かと云つた生活をなして、人間世界を忘れた心が、恰度仰

山に見ることが出来る。世にあつて世を忘れ、山にあつて山を忘れ、人にあつて人を忘れる生活が和尚に認められる。

玉のごとく明朗に、しかも愚者のごとく世を忘れる。この超人の生活が今の世にもつとも望まれていい筈である。せめてあのピリ／＼としてゐる顔面神経が、もう少し長閑になつていい筈である。あの蒼白なこけた頬に、もう少し丸みと赤らみとが欲しい。

三五、笑 (前三後三)

人間世界から笑と云ふものが無くなつたら、人間世界は何んなに殺風景で鬱陶しい淋しいものであらうか。實際人間世界は顰めつ面と恵比須顔との中間にあるやうだ。其の動き易い左右の動搖の中間にやうやく平均を保つてゐるのが

人生である。

世間を眺めて見ると、種々の人が居る。其の面相がみんな違ふやうに、心も違ひ境遇も違つてるやうだが、其れは鹿爪らしい眞顔をしてゐる時ばかりである。悲しい時や可笑しい時には、其の表情がみんな同じやうになる。勿論其の表情にも差異はあるやうだが、あれは面相の相違が其れに作用するからだ、其の面相の持前を差引いたら、みんな同じ表情になる。其れと共に境遇も心も其の持前を忘れて一樣になる。

人は一人であることが淋しい。其處に人間の社會性が本能として存在するのであらうが、人々がお互に其の個々のものを忘れて同じ心、同じ境遇になるところに、人の社會の眞實の結合があるとすれば、人々は悲しみ笑ふことの孰れかによつて己を忘れ他と共に楽しむことが出来るのであらう。

我が國の國民は熱し易いと云ふ。其れは我が國民の缺點だと云ふ。それは確

に間違ひだ。それは我が國民の最大の美點だと云つて差支へがない。熱し易いから、悲しんだり笑つたり其の悲しみ笑ひが國民の個々を忘れしめて、世界一の結合ある國民を形作つたと云つてもいいであらう。

國家の危機に際して國難を悲む心が、期せずして國家のために一身を捧げて悔のないのが我が國民であり、國家の慶事に會して自己を忘れて踴躍ゆうやく歡喜するのも我が國民である。勿論其處には血液的有機的の連繫があるとしても、其れ以上に國家に對する熱愛が更に自己を忘れる國民性を創つたことは疑へない。

ものあはれと云ふ精神がおかすと云ふ精神と共に同じ意味を持つのは我が國家に於てである。悲みより發したもののあはれの精神と、笑ひより發したおかしの精神とが、全く其の出發點を對蹠的におきながら、同じく風雅の意味を持つのは其の故である。悲みや笑ひは己を忘れる。其の忘我的な心が、即ちものあはれであり、おかしである。己を忘れて自然に融合する。其處に風雅の

心がなくてはならぬ。其の自然は現實であり、現實の生活の上に自然の心を生かすところに風雅があり我が國民性が表徴せられる。

我が國民は笑ひの素質を多分にもつた民族だと云はれてゐる。現實的で淡泊な性質が笑ひに近い素質を作つてゐるのであらう。笑ひにも種々あるが、我が國民はア行とハ行に笑ひの音的表出をする。アハ、イヒ、ウフ、エヘ、オホ、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、これが普通であるが、カ行の笑ひにカラ、カンラ、クス、ケラ、ゲラがあり、ワ行の笑ひにワアツハ、があるが、これは特異の部類に屬すると見ていいであらう。

しかし笑ひは音に於てのみ表出せられるのみでなく、心で笑つて音にも表情にも現はれぬ深い笑ひがあり、表情にのみ表れて音に表はれぬものもある。そして又、音に現れ表情に現れても、心に笑はぬ作り笑いもある。しかし笑は大抵は心と表情と音に同時に表れることは云ふ迄もない。

けれども笑ひの素質は、人々の心が種々であるやうに種々に違つてゐる。冷笑や嘲笑と云つたやうな不純な笑ひもあり、作り笑ひと云つたやうな偽瞞的なものもあれば粘華微笑ねんけみせうと云つたやうな最も高尚なものもあるが、其れが忘我的であると云ふ一點に來ると、個我的な笑ひの素質は消却してしまふのである。

そして其れは神に近いものとなる。天の岩戸の前に集まつた八百萬の神々が、天の鈿女の命の滑稽な所作にドツと己を忘れて笑つた時、天照大神が天の岩屋戸を開けて御覽なされたと云ふことは、笑ひが神に近いものであることを瞑々に覺らしむるものがあり、其のために一天明々として暗雲は遠く拂はれ、美しき國の光が照り輝くに至つたことは、笑ひはやがて國をして明朗なる世界たらしむるものであることをも思はしめる。

人が笑ふと云ふ生理的な意義は醫者に委せて、其の心理的なもののうち、カルカチユアーに對する笑ひが一番他愛のない純な笑ひのやうである。人の失策

や人の滑稽を笑ふのでなくて、自然に與へられたる不可抗的なものに對する無力な人の、しかも無心にする動作程純に可笑しいものはない。

支那の五台山は文殊菩薩の應現の靈地として有名であるが、無著和尚が或る時五台山に行つて文殊菩薩に會つて問答すると云ふ一條がある。文殊菩薩は無著和尚に問ふて云ふ。

「お前は何處からやつて來たな」

そこで和尚は、

「南方から參りました」

と答へる。菩薩は、

「南方の佛法の様子は何うじやな」

と問ふと、和尚は

「大した出家もをりませぬが、中には戒律を護つてゐる者もをります」

と答へる。菩薩は、

「其の戒律を護る僧は幾人位ゐるかな」

と問ふ。和尚は、

「三百か五百位をりませう」

と答へる。ここで一轉して、今度は和尚が盲目蛇に怖ぢらずで菩薩に反問する。

「此處の佛法の様子は如何でございますか」

菩薩は、

「さうじやな 凡夫も聖者も、龍も蛇も一緒くたじや。何の差別もないよ」

そこで和尚は更に詰めよる。

「左様な方々が幾人程をられますか」

菩薩は、

「前三三後三三」

と答へた。

ここで無著和尚はギャフンと尻餅をついてしまつた。

五台山は名が示すごとく五峯が屹立し無数の峯々が其れを圍つて、色は藍の如く崇高にして端麗なる山である。この神の如き淨地に於て、無著和尚が文殊菩薩と對談したなんか、誰れが左様な滑稽なことを考へ出したのか、其れだけでも淨域が汚れてしまふ。

其れに御叮嚀にも和尚が菩薩に、

「ここに幾人程の僧がゐますか」

なんて問はせてゐる。龍車に向ふ螻蛄よりまだひどいカルカチユアーでなくてなんであらう。雪寶は、腹を抱へて哄笑せざるを得なかつた。それのみではない。菩薩が、

「前三三後三三」

と大きな石ころを和尚の前にどつかと投げつけた。和尚は蛙のやうに無感覺な顔をしながら眼をパチクリやつてゐる。其れは更に其の場面をして、より以上に滑稽に、笑ひの極限まで引づつてゆくやうだ。

この笑ひは、凡聖龍蛇も一緒くだ。己を忘れるところに差別はない。菩薩が云つたやうに前三三後三三だ。後三三前三三だ。みんな佛だ、何の差別もない。大乘一乗だ。笑ひの世界は凡聖龍蛇其のままが、同時に佛だと云ふことは尊い。笑ひは神に通ずる。

三六、悠々 (長沙遊山)

悠然として南山を見ると云ふ言葉があり、悠々閑日月ありと云ふ言葉もある。悠々自適とも云ふ。悠と云ふ言葉がよく支那の詩人たちに使はれて其の自

適の生活が示されてゐる。悠々と云ふ言葉を聞けば、遠い世界を眺めてゐるやうな、遙かな空を睥めてゐるやうな、氣の遠くなるやうな茫漠たる感じを與へて來る。

世智辛いせせこましい人間世界に、この悠々と云ふ言葉は無量の功德を與へて呉れる。その發音を聞いてさへ如何にも悠々と云つたやうな長閑な心を味はふことが出来る。忙しい仕事の僅の時間に煙草喫らしながら悠々と考へてゐると、仕事も自分も忘れてのんびりした快さを感じるし、夜分寢床に這入つてから悠々と考へてゐると知らぬまに寢入つてしまふ。そして又其の夜の眠が、莊周じやないが、胡蝶となつて羽化登仙するやうないい夢を見せて呉れる。

しかし悠々と云ふ生活は、如何にも閑日月ありで、暢氣な生活のやうであるが、決して閑雲野鶴の生活のみを示すと考へては不可い。閑雲野鶴を追ふ生活は望ましい自然生活ではあるけれども、唯今の生活に於て、かかる暢氣な生活

は持合せがなく、持合せがないからと云つて悠々の生活が出来ぬかと云へば、左様でもなささうである。

然らば其れは如何なる形式に於て現實の生活に持來することが出来るであらうか。其れは外でもない、悠々の生活の意義に徹することである。悠々の生活は眞實に於て跡を残さぬ生活であることを忘れてはならない。道元禪師が云つてゐるやうに自受用三昧の生活である。一切の生活を三昧化することである。

仕事にあつて仕事の三昧に這入る。其處には仕事が無くなる、悠々である。家庭にあつては家庭の三昧に這入る。其處には家庭は無くなる、悠々である。寢る時は寢る三昧に這入る。其處には寢ることが無くなる、悠々である。かくのごとく、すべてに於て跡を残さぬ生活をすれば、其れは悠々である。

世間の人は跡に残したがる性格を餘りに多分に持つてゐる。家を残し、金を残し、地位を残し、名を残し、おまけに壽命まで引延さうとする。其の故に悠

悠の生活を望みながら、其れが出来ないで、世の辛さを肝に銘じてゐるのである。

うつかりすると悠々を履違へて、カフェやお茶屋に一時の閑を偷み週末の遊行をせなければ閑月月がないと考へてゐる。ハイキングもよろしい、旅もよろしい。しかしハイキングや旅のみが悠々の生活であると勘違することは大いなる間違であることを注意しなければならぬ。

悠々の生活は何處にもある。何時でもある。物に捉はれず、物にこだわらず、物に於て物を忘れる。人に於て人を忘れ、國に於て國を忘れ、天に於て天を忘れ、佛に於て佛を忘れる生活が悠々の生活である。三昧の生活であり、跡を殘さぬ生活である。

長沙和尚が散歩に出て、門の處まで歸つて來ると、寺の首座が其れを見付けて云つた。

「和尚は、何處へいらつしやつたのです」

和尚は、

「散歩して來たんだよ」

首座はなほつづけて、

「何の邊を廻つていらつしやつたんですか」

と問ふ。和尚は、やんわりと事も無げに、

「行く時はな、道草の花が美しくつてね、花に見とれつつ何處とも無しに足にまかせて歩いたがね、歸る時もさ、ひらくくと散る花が面白くつて、花を追うてる間に、ここまで來たつちやんだよ」

薩張どこを歩いたか覺えがない。そこで首座も問うた所詮がないから、お茶を濁して、

「そりやいい春らしい散歩でございましたな」

と云ひながら、和尚の隙をねらつてみる。ところで和尚は、

「ううん、秋の露が蓮の葉より滴る寂しさよりはましじやな」

と、あつさり云つてのけて、首座の太刀の入れ所がない。全く跡を残さぬ和尚の悠々が露呈せられてゐる。雪竈は首座に代つて和尚に禮拜して其の答へを多謝せずばなるまいと云ふ。

長沙和尚の世界は一點の塵埃も止めぬ清淨無垢の世界であり、佛や凡夫や悟や迷やと云ふやうな塵埃を拭ひ去つて、本來の面目が躍如としてゐる。輝かしく現實が其處に眼を開いてゐる。咲く花を追うて行き散る花を逐うてかへる。この春意は、直ちに瘦鶴の枯木に立ち人無き丘に猿聲を聞くの冬景と何等變ることはない。現實を離れ得ぬ人にこそ、春冬の差別はあれ、悠々の生活には差別はない。春は春の三昧に、冬は冬の三昧に於て何の變りがあらう。春は春としてよく冬は冬としていい。長沙和尚の悠々の生活は、云ふて盡せぬ。云ふこ

とは直ちに長沙を汚すことになる。咄。

三七、無法の世界 (三界無法)

人には何か知ら餘計な世話をしたがる癖があるやうだ。じつとしてをればいいのに、何か餘計なことをせずには濟まない困つた病がある。白い壁でも見れば落書の一つもして見たくなる。静な水を見れば石の一つも投げたくなる。綺麗な砂濱に文字の慰みを残して見たくもなるものである。

この癖が、人間世界を十重二十重に窮屈にしてゆくのだ。じやあるまいか。知識の上に知識を積んだり、學問の上に學問を建てたり、地位の上に地位を重ねたり、金の上に金の塔を作らうとする。其の故に人は知識に酔ふたり學問の重壓に苦しんだり、地位の重さにへたばつたり、金の重みで窒息したりする。

知識は淵へすて、學問は紙屑籠へ押し込み、地位は吹飛ばし、金は施行したら、何んなに人間は樂になるであらうか。と云つて其れ等のすべてをみんな棄ててしまへと云ふのではない。與へられたものは與へられたままに生かしてゆけばいいのである。餘計なものを棄てよと云ふのである。

けれども人は、本能的に或は運命的に其れを棄て得ないのみか、益々積み重ねることに興味を持ち愛惜を感ずるのである。其れは人間世界を窮屈にするのみならず、人間世界を汚しさへすることを忘れてはならぬ。人間世界の腐敗は、かかる塵埃の堆積の體るところから生れて來るのである。

人間世界に於て尤も崇高なるものは道であると考へられてゐる。道は人の歩むべきところである。人の進むべきところである。人の生活の方向である。これなくしては人に生活の歩みなく、生活の進歩なく、生活の方向が無くなつてしまふ。人は路頭に迷ひ社會は止水のごとく腐敗するより他に道はない。

道には種々の道がある。神道、儒道、佛道と云つたやうな道が人道として教へられてゐる。しかしこれ等の道は、人の病として積重ねられたものであつてはならない。其れ等は決して人の癖から生れたものではなく、寧ろ人の病を癒し人の癖を矯めるために存在するものである。ところが人は、やはり其れにさへ人の癖人の病を膠著せしめてしまつてゐるのである。

神道や儒教や佛教が如何に多岐に亙り、如何に尨大なる體系を持つやうになつたか。其れは寧ろ人の道を教へるものでなくなつて、人の道をあの重い圖體が重壓して、人を窒息せしめてゐはせまいか。人は其の重荷に堪えかねて、他に道を求めさへしようとしてゐるのじやあるまいか。さうでなくとも、せめて其の重荷の分解によつて、重さを減ぜようとしてゐるのじやあるまいか。或は其れを解體して新裝に更衣しようとしてゐるのじやなからうか。

神道や儒教や佛教が其の本來の使命を忘れて、神道となり儒教となり佛教と

なつたことが世の宿命とは云ひながら、其れは邪道に迷つたのである。其れは何處迄も惟神の道であり、儒道であり、佛道でなくてはならなかつた。其れが哲學的に、倫理學的に教育學的になつたことは、人の癖がさうせしめたのであつて、其れは其れとして別途の道を行くものであつて、決して本來の面目でないことだけは事實である。

人の癖は、其の道までも歪曲する。佛法と云へば何か變つた法があると考へる。心と云へば何か心と云ふ違つたものがあると思ふ。其の癖がつひに種々なる幽靈を作つてしまつた。まして其のありもせぬ幽靈に迷ひ怖ぢてゐるのである。何も無い明朗な宇宙と云ふ鏡を自ら汚して、其の映らぬ鏡に苦しみ不足を云つてゐるのである。

明朗な現實を自ら曇らして、鬱陶しい世の中を啣つてゐるのである。其の曇を拂拭することは、人生生活の最大喫緊事じやあるまいか。道を明朗にするこ

とが何よりの急務であることに眼覺めなければならぬ。親鸞は平生業成と云つてゐる。道元は現成公案と云つてゐる。日蓮は法華經を生活に生かしてゐるじやないか。遠くは天台が諸法實相と云ひ、更に遠く釋迦は草木國土悉皆成佛と云つてゐるじやないか。其處には現實を直視せよの教へが強く叫ばれてゐるのである。

しかし人は、其の眞實な叫びを聞いてさへ、なほ其の聲に捉はれて其の眞を失はうとする。やはり法あり心ありの病が膏盲に入つたのである。其のためには、更に其れ等の先匠の教へを明確に人に生すためには、寧ろ無法の世界、無心の心を提唱することが却つていい藥となるであらうか。

盤山和尚が垂示して云ふ。

「三界無法、何の處にか心を求めん」

と。宇宙には法もなければ其れを求むる心もない。宇宙はあるがままである。

其處に何を求むることがあらう、悟りを求めてもいけない、佛を求めてもいけない。いけないじゃない、其の求むる心さへも無い筈である。あるがままに露呈せられるものに、何故に奇を求めるのであるか。

三界無法、何れの處にか心を求めん。仰げば限なき蒼穹に白雲が遊弋してゐる。俯げば潺々として溪流は流れてゐる。この自然の階調を、人は見ながら其れを忘れてゐる。夜の雨に池の水嵩が増したと云ふ平凡な、しかも眞個の現實を眞に知るもののみ、無法の廣い世界に住み得るのである。

三八 心 (風穴心印)

心と云ふものは何んなものか。少くとも人々は心を持つてゐる。心の持合せのない人は一人もない筈だが、其の正體を知る人は少いらしい。心のあること

は知つてゐるが、心のあり所を知つてゐる人も少いらしい。

人間の智能感覺の中樞は頭脳にあるが、しかし頭に心があると誰も云はないのが不思議である。指を傷けると指が痛い。實際を云へば頭が痛くなるのが本當でなければならぬ筈だが、やはり指を傷けば指が痛い、脚を傷ければ脚が痛い。だから、たとひ智能感覺の中樞が頭にあつても人は頭に心があるとは云はなす。

心は胸にあると云ひ、腹にあるとも思はれてゐる。胸三寸にしまつておくこと云ふ。腹を探つて見るとも云ふ。恐らく心は人の中心であると云ふ感じが、心の在所を肉體の中心にもつて來たものと見える。

心には形が無いと云ふ。心は宇宙に遍滿すると云ふ人もある。ところで心には形があつて丸いものじやと考へてゐる人もある。其の何れもが大眞面目でさう考へてゐるらしい。心はコロコロの約つたもので、心はいつも常にコロがり

づめであると説明する人があることから見ると、何か丸いものででもあるらし

5
佛教では佛の心のことを心印と云つてゐる。心は信であつて誠を示し、印は印可決定と云ふ意味で紛ひのないこと、間違ひのないことであると説明せられてゐるが、兎に角其の心のことを心印と云ふのである。其の心印とは如何なるものか。少くとも其の形は何んなものであらうか。

風穴和尚が郢州いびの役所で禪を講じたことがあつた。其の時に聽衆に向つて、

「禪の祖師の心印の形は鐵牛のやうじや」

と云つた。佛の心印は勿論、法性とか法とか悟とか云ふのだが、其の形は鐵牛のやうだと云ふ。支那の陝州せんに鐵牛廟があつて、黄河の守護神である鐵牛が祀つてある。この鐵牛は黄河の上を跨いで、頭は河南に尻毛は河北にあると云ふ大物である。達磨大師が心印の形を鐵牛の如しと云つたのは、心の不動の有様

をたとへたのであり、手の付けやうのないことをも云つてゐる。

この手のつけやうのない不動の心印が、佛の心であり達磨の心印であるが、それは同時に各自が持つ心であり心印であることに間違ひがない。しかし其の心印が不動であり手の付けやうがないものであるが、其れが如何に活躍するか、其れを如何に生すかに問題は集中する。そこで和尚は印形の例を持つて來る。

「印形と云ふものは、紙の上に押しつけてそして其の印形をとればはじめて印文が紙上に残るのであつて、印形を其のまま紙の上においたでは印文は現はれぬ。と云つて印形を離れて印文もなければ、印文が無くては印形の意味はなくなる」

紙は人である。印形は佛である。印文は佛の心である。吾々が佛と云つて佛をあるものと強く佛に執してゐることは、印形が紙に押しつけられたままである

と均しい。佛心が其の身に受けられながら、佛心が現はれて來ぬのである。吾が一度佛の執著から放れたとき、其處にあり／＼と佛の印文が残つてゆくのである。

しかし、和尚は又いふ。

「今度は更に印形を押す以前に返つて、さやうな印形を捺すがいいのか、捺さぬがいいか」

印形てなことを考へてゐることが既に間違つてゐるが、人を導く方便として和尚は云ふのである。聽衆は怪訝な顔をしてゐる。其のうちに廬陂長老と云ふ人があつて、勇敢にも和尚に一言を呈して見る。

「和尚、私には佛の心印がござる。和尚、印形だの印文だのとシヤラクサイお話は御免蒙むりたい。ありのままですよござる。」
如何にも悟つたつもりである。ところで和尚は、

「俺はな、鯨を釣つて海の濁るのを澄すますことには押れてゐるがの、蛙が泥の中でころがつてゐるのは、チト迷惑じやな」

長老はギャフンと參つて、黙つて考へてゐる。そこで和尚は大喝して、

「長老、サア何とか答へぬか」

と云ふ。長老はなほもぢ／＼してゐる。和尚は拂子で打つまねをして、

「長老何うしたのじや、お前は佛の心印があると云つたじやないか。其れを未だ覚えてゐるなら、其れらしくせないか。」

と詰めよる。長老は何とか云はうとするが言葉が出ない。和尚は再び拂子で打つまねをする。

これを見かねた知事は、長老に代つて、

「佛法と世法とは均しいと思ひます」と挨拶する。和尚は、

「何うしてじゃな」

と問ひかへす。知事は、

「たゞ斷の一字が一切を處理いたします。姑息では迷亂の解ける時がない。」
この答へを聞いて和尚は壇を下つて禪の講演を了つた。

吾々が心の在所や心の形を求めてゐる間には心は到底其の姿を見せて呉れない。心を以つて心を束縛してゐては、心の自由は到底得られるものではない。かかる一切の邪魔物を斷の一字によつて拂拭すれば、其處に心が生き、心が心としての生を樂むであらう。

風穴和尚のやり方ははげしい。盧陂長老を鐵牛に乗せて散々に嘖さいなんでは、大河の水をも逆流せしむる慨がある。この痛快なる禪の鋭鋒に摧かれなければ、人の心は眞の自由を得ることは難しからう。それ程人は心を問題としながら、心の自由を失つてゐるのである。脚下を見よじゃ。

三九、金毛の獅子 (清淨法身)

或時一人の雲水が雲門和尚に向つて、

「如何なるか是れ清淨法身」

と問ひかけた。清淨法身と云ふのは眞如法性の理を示す言葉であつて、宇宙の眞理と云ふ意味である。突如として提出せられた大問題である。和尚は卽座に、

「花藥欄」

と答へてゐる。花藥欄とは、花咲く生垣と云ふことである。和尚は庭前の籬を見てゐて、其れをそのまま口走つたのであらう。これでいいのである。宇宙の眞理と云ふやうな大きい問題を提言し來たつて、いろ／＼と説明しても其れは

盡きる時がない。それよりも其の眞理が如實に現はれてゐる一切の諸法の一つを指せばそれで充分であつた。そこで雲水は、

「左様でございますか、しかし左様に心得ました時には如何様になりませうか」と問ひかける。和尚は、

「金毛の獅子」

と答へて口をつぐむ。

金毛の獅子と云へば立派なことじやと云ふ言葉である。

しかし、この立派な事じやと云ふ言葉は雲水の問ひを肯定したのか、否定したのか、薩張解らない。金毛の獅子が喉につまるのである。

今雲門が清淨法身の答へとして云つた花藥欄の言葉を丸呑にしては不可い。秤を見るがいい。秤の棒には目盛がしてあるが秤の皿には目盛が無い。花藥欄くわやくらんと云ふ言葉は秤の皿で其の言葉を云つた雲門和尚は秤の棒である。だから其の

言葉には何等の力も何等の眞理も含まれてはゐない。雲門和尚の花藥欄と云つた言葉の眞意は、和尚其れ自身の心にあり人格にある。

それなのに、雲水が知つたか振に、左様に心得たら如何様になりますかと云つた言葉は甚だ心もとない。解つたやうな解つてゐないやうな、洵に曖昧な態度である。だから和尚が金毛の獅子と答へた金毛の獅子の言葉も従つて和尚が其れを如何なる意味で云つたか判然せないことになる。

金毛の獅子。美しき金毛の獅子を思つて見るがいい。それがたとひ解つてゐようが、解つてゐまいが、金毛の獅子には何の疵もつかない。解つてゐること、解つてゐないこと、左様なことによつて、宇宙の眞理は微動だもせないものである。

吾々は物を知つたと云ふ。しかし物を知りつくすことが果して出來得るであらうか。知り盡してこそ初めて知つたのである。知らうとする道程に於ては知

つてゐるのじやない。知らんとしてゐるのである。けれども如何に努力しても物を知ると云ふことは出来得ない。尤もある程度に於て知ることが出来るであらう。それは知の初歩にしか過ぎない。

初歩の知において、すべてを知悉したかのやうに己惚れるものは傲慢な人間だ。人間には知覺と云ふものがあり、其れが何よりの武器であるやうだが、其の武器によつて自らを傷けるものが幾人あるか、勘定に苦しみはせないだらうか。

結局何等知らうたつて知りつくせるものでないと解つたものが、すべてを知りつくすことになる。親鸞は愚痴にかへつて如來の本願に眼醒め得たのである。愚痴の法然房はふれんぼうが眞實に念佛の生命を享け得たのである。金毛の獅子は、一切の人間智を拂拭したところに嚴然として存してゐる。

四〇、自 立 (天地同根)

陸亘大夫が南泉和尚と話をしてゐた次に、突然陸亘が云ふには、

「僧肇法師が云つてゐる、天地と我と同一だし、萬物と我と一體じやと云ふ説は又甚だ面白い考へですな。」

と。南泉はこの言葉を聞いて、庭の牡丹の花を指差しながら云つた。

「あれを御覽、世間の人はこの一株の花を確り見ないで夢のやうに見てゐるじやないかね」

と、苦笑するのであつた。

僧肇の説は有名なものだが、しかし其れは一方的である。萬物は種々雑多で各々差別があるが、其のために人々は其の差別の相に捉はれて妄想を逞しくす

る。其の非を棄てしめるために、僧肇は萬物は差別無限であるが、其の根本に立返へれば決して差別があるのではない、恰度波は千波萬波と現はれるが、水であることに於ては何等違ひがないやうに、草も木も人も佛と根本に於ては同一だと説明する。

尤も、この説明には間違はない筈だが、しかし其れは一方的である。それを矯めるために和尚は、

「人はこの花を夢のやうに見てゐる」

と云つたのである。一株の牡丹を見ても、うつかり眺めてゐるのである。天地同根だとか萬物一體だとか、さうした理屈を漠然と夢のやうに考へて、現前する事實を無視しようとする。

吾々の視界に入るものは種々雑多である。其の種々雑多なるものを、其のままに吾々は知覺してゐるのである。それでいい。殊更に、自己の心の範疇に其

れを入れる必要はないのである。寒夜の深更月落ちんとして人なきとき、誰が物好に月を求めて歩くであらう。しかも其の月が、物凄く澄切つた水面に映つてゐる。其の景は果して何を意味するか。月に心あつて水に映るのでもない。水に心あつて月を宿すのでもない。月は月、水は水である。其れはすべて自然である。

人はともすれば自己の脚下を忘れようとする。理想に眼が眩んで現實を忘れてゐる。明日を考へて今日を忘却してゐはせないか。自己に現前するところは唯今の刹那である。過去も、未來も、この現實に於てのみ考へ得られるのである。時間的に躍つてゐる人間的な有爲の世界から、空間的に擴がる自然の無爲の世界に眼を轉ずるがいい。生死は其處になくなつて永遠の日が其處に輝いてゐる。

四一、生 活 (趙州大死底人)

人は意識すると意識せざるとに拘らず生活してゐることだけは事實である。夜が明けると何處の家からも戸を開ける音が聞えて来る。川で洗面しながら朝の挨拶が交される聲が聞えて来る。用事のない子供までが、早や道へ飛出して何やら騒いでゐる。

そればかりじゃない。まだ未明の三時四時に工場の汽笛やサイレンが聞えて来る。夜も眠らずに働いてゐる人があるのだ。あの汽笛を聞いて内儀が寢床を出でて炊事をする。亭主は旅に出るやうに早起をして、暗い内に家を出るのであらう。夜深いと思ふのに自轉車の音が聞えてゐる。それが毎日である。

朝家を出でて勤めに出ると、方々の村々から幾人とも數知らず出ては走つて

行く。自轉車やバスや電車で急ぐのである。電車に乗つて見ると、いつも鈴なりである。同じ頃に家を出る勢か、同じやうに、同じところで、同じ人と殆んど毎日顔を合せるのである。それが十年一日の如くである。

みんな働いてゐる。みんな生活してゐる。それでいいのである。みんな何か考へてゐるやうだ。それは多分仕事の事を考へてゐるのであらう。あれをああして、これをかうしてと思つてゐるのであらう。それでいいのである。罷り違つて生活とは何ぞやなんかと、大それたことを考へぬがいいのである。

ところが、兎もすると、そんな厄介なことを考へたがる癖が人間にあるものだ。禁斷の果實は喰はぬがいいのだが、禁斷の果實なればこそ食ひたいと云ふのが人間で、食心棒であるから情ない。

生活とは何ぞやと云ふやうな厄介なことは滅多に考へぬがいいのであるが、人の癖は七癖と云つて、小さい時から附いたやつは、これも滅多に癒らない。

其の癖を歡ばせるために大學てな學校があつたり、哲學てな學問があつたりする。

しかし癖は結局癖であつて、癖のつかないのが眞實で、癖のついたのは病氣である。この病氣が癒ると、ただの人間であることの幸福がしみじみと悦ばれるやうになるのである。うんと學問して理屈を捏ねて捏ね廻した擧句の果が、結局人間の現實に還つて來るのである。まあ學問もやつてみるさである。

趙州和尚が投子和尚を試みようと思つて問うたことがある。

「大死底の人、却つて活する時如何ん」

と云ふのであつた。大死底の人と云ふのは大悟徹底した人と云ふことである。

其の大悟徹底した人が、世の中に處するには何うしたらいいかとの問ひである。寂定の床を起つて如何に振舞つたらいいかと云ふことになる。そこで投子和尚は、

「顔を洗つてお出で」

と、アツサリ片附けてしまつた。這がの趙州もギャフンと參つたわけである。悟るの活ると、そんなことを考へてゐることが、既に間違つてゐるからである。うつむいて十年一日でよいのである。

趙州は偉大なる禪匠であるから、活眼を開いた和尚である。だから愚にかへつて投子和尚を勘驗しやうとしたのであらう。ところが、投子のやうな大和尚に、禪では禁物の死とか活とかの問題を出したのは餘計なことであつた。

だから背負投を喰つたのだが、生死の上にある生活は誰も未だ到らない大難關であつて、投子は、それを如何に挨拶するか見物である。ところで投子はアツサリを顔を洗へとやつてのけた。これは恰度、眼に砂を投げつけたと同様、一切の葛藤と見えぬやうにしたところに味がある。

生死迷悟てな葛藤を見ぬところに、生活の幸福がある。生活とは何ぞやと云

ふやうな葛藤を滅多には考へて見るものではない。投子和尙に砂を投げられ、趙州和尚のやうに顔を洗はねばならぬかも知れない。生活を生活すれば、それでいいのである。

四二、日常瑣事 (鹿居士好雪片々)

日常の生活には種々な事件が、次々に意識的に或は不意に突發するものである。それが大であつたり小であつたり、或は自分の眼にもかからず過ぎ去つてゆくものさへ可成ある。

事の大なる場合は、人は其れを解決するために一生懸命になるし、又その一つの事の解決のために生涯を捧げることさへある。けれども事の小なる場合は日常の瑣事として雲煙過眼視してしまふのである。日常茶飯事として問題とせ

ない。

しかし其の茶飯事が決して茶飯事として棄てらるべきではない。禪には日常茶飯事と云つて何でもないと意味してゐるのであるが、和尚のやうに他によつて衣食するものは、食を得ることは水を得るが如く、日常茶飯事として濟むかも知れないが、世の生活に於て尤も重大なるものは、この茶飯事であるのだがね。

其の茶飯が得られないで路頭に迷つてゐるものが幾人あるか。たとひ路頭に迷はずともその危い線^をを彷徨するものが幾人あるか。それでなくとも人は營々として稼いでゐるのは皆茶飯が其の目的の大なるものである。

衣食足つて禮節を知ると云ふ。衣食の上を行く生活はまことに幸福な生活とせなければならぬのである。日常の茶飯が日常の茶飯事として濟まされ得るならば、恵まれたる生活を先づ禮拜せなければならぬ筈である。衣食なき人間は

世の中にゐないなんて、大きな口はきくまう。

日常の瑣事はかく考へて來ると決して日常の瑣事でなくなる。事に大小があるのは其の人々の主觀の目分量によるのであつて、元來事に大小は無い筈である。千丈の堤も蟻の穴から崩れると云ふ。瑣事を瑣事として忽せにすることは、大事を忽せにすることよりも恐るべきである。

大事には人は懸命になる。其の處置については手拔かりは先づないとしていゝ。人は小事に失敗し易いのは瑣末なものとの油斷から來るのである。不治の難病には充分な手當をすることによつて、其の生命をつなぐ事はなし得ても、顯微鏡的なバチルスが生命を奪ふことを忘れ勝ちである。日常の瑣事は決して忽緒に附するべきではない。何時其のために躓くか知れたものじゃない。

龐居士が藥山和尚のもとを辭して歸るときに、和尚は十人の禪客に門のところまで送らせた。ところが恰度其時雪が片々と降つてゐたので、居士は空を眺

めながら、雪片を指して、

「ふふ、雪が降つてゐるな。他へは落ちんでなあ」

と獨言を云つた。ところで、十人の禪客の中に全禪客と云ふものがあつて、

「居士どの、あなたは他へは落ちんと仰しやるが然らば何處へ落ちますか」

と訪ねた。居士はピシヤリと横面をやつた。

禪客は其れにも恐れず、

「居士、そりやあんまり早まつてはゐませぬか」

と又も附加へる。そこで居士は、

「雪の落處も解らず、しかも打たれて未だ醒めぬでは禪客としての資格がある

かい。今にも生死巖頭に立つ時、閻魔王の痛棒は免れまいぞ。」

と叱する。それでも禪客はこりもせず、

「居士、あなたは何うですか」

と喰つてかかる。居士はまたもやピシヤリとやつて、

「この雪が眼に入らぬか、其の落處が口に云へぬのか、馬鹿ものめ」と云つて地を指したであらう。

何でもない事に引かかつて四苦八苦してゐるのが、この禪客である。觀念に浮かれて現前の瑣事が眼に入らぬのである。雪の落處が知れぬのでは三歳の童子にさへ頭が上らぬ。そのみじやない。降る雪を見て他へは落ちんてなことを云ふ居士も何うかしてゐると云はなければならん。

雪竇はこの問答を聞いて、俺なら地上の雪を丸めて、居士の獨言の時に早速居士の頬に打ちつけてやるのにと云つてゐる。さうだ、それが一番いいことであつた。雪が降ると云ふ事實は現前の日常の瑣事である。それに勿體をつける居士までが、其の瑣事を觀念化しようとしてゐるのだ。日常の瑣事を瑣事として正直に受取ることを忘れかけてゐる。

雪團を打ちつけるのがいい。さうしたら如何なる居士でも、禪の自慢の鼻が挫けるのであらう。雪が降ると云ふ事實は、神も佛も其れを言説することは出來ない筈だ。唯降つてゐるのである。地上に降つてゐるのである。清淨無垢に地上を覆うてゐるのである。しかし清淨無垢と云つてさへ、雪に傷がつく。唯雪である。雪なのである。この雪の消息は達磨大師でさへ解るまい。

雪が降つてゐるのである。それでいい。それは日常の常に逢ふ事實である。日常の瑣事は瑣事として正直に受取ればいいのである。それに言分をつけたり、大さうに見たり、知らん顔をすることは間違つてゐる。大事に恐れず小事を忽せにせず、唯日常の事如何なる瑣事にも心許すべからずである。

四三、寒

さ (洞山無寒暑)

北の山々に雪が白く積つて、其れが四月を迎へるまで消えることがない 遙

に遠く眺める其の北山から雪の冷をなでて来る寒風は、冬中この平野を冷して吹きすさむのである。その上にこれも遙な西の六甲から又寒い海面からも用捨もなく冬の季節風を送つて来る

相憎にも東に山が近く、北と西に近く山をもたぬこの平野は、寒風の交錯によつて、いやが上に寒さを募らせられるのである。せめて風さへなければ、何んなに凌ぎよからうと村人は常に愚痴をこぼして居る

菜種や麥や豆を植ゑた畑の土までが凍つて、見てさへも氣の毒に豆などは萎えてゐる。そのみではない。歩いてゐる道の路面が凍つて コツコツと金屬的な音を立て、靴の底へは痛い感じをさへ與へる。

たとひよく晴れたい日であつても、太陽の熱をさらつてゆくに充分な寒風が、折角の日射をさへ無下にないがしろにしてしまふ。庭を眺めても、空を眺めても、たゞ灰色の空と一般、實に鬱陶しいことである。古風な家は採光に殆

んど無關心で、それが益々冬を憂鬱にする。

暖房の装置と云つたやうなことは、新しい洋風の家か普通の家に於てなされ得ようが、だだつ廣い古風な家に於ては、唯火鉢に餘計炭をつぐより他、仕方がない。自分が寒いのは未だ辛棒するとして、子供の所在なささうな寒い顔を見ると、實際何とかせにやならんの責任を感じる。

山の庵室に引移つて、太陽の光と熱を充分に満喫させてやりたいとは思つてゐるが、今の事情では、それも尙ほ前途が相當にある。採光と冬の準備は、やや近代的で、洋風ではないが、寒風を凌ぐためには、兎に解満足と云つてよく、其の上に冬を楽しむことさへ出来るやうだ

硝子を通して見える冬が、冬のもつ冷と云ふものをぬきにして味はれる。冬の音を聞き、冬の色を眺めて、其處に冬によさをしみぐと感ずることが出来る。冬を好まぬ自分にも冬を楽しめる方法はこれのみだ。冬から寒さを割愛

すれば、如何に冬が面白からう。しかし其れは夢かも知れない。寒さを割愛して冬は存在せないから。それでなくとも餘りに計算がよすぎる。

今では時々其の香を嗅ぎにゆくだけで満足せなければならぬ。寒風について勇士のやうに生活戦場に馳驅せなければならぬでは、充分なことも云つてゐられない。ちり／＼と冬の短い日が夕の空に低く春くころ家路を急ぐ時、古風な暗いこの家が如何に慕はれるか、小鳥が巢を懷んで歸るやうに、まつしぐらに家路を指すのである。

暖かい火鉢に凭つて、あか／＼とついた電燈の下で温かい夕食の卓につくことと、ほや／＼と湯氣が眞白に立つ風呂を浴びることと、重ねられた蒲團の中で炬燵の温かさの感觸を脚に感ずることが、自分の冬の三つの悦である。夜に於ては冬も楽しい。

武藏野の田舎村に六年の歲月を送つた時も、冬の寒さには閉口した。ちかち

かと肉に喰入る底冷をじつと喰しやる時の不愉快さは、今でもゾツとする。空風が頬をなでる時の冷たさも覚えてゐる。櫛の葉がすつかり落ちてしまつて、枝ばかりの寒さうな高い並木を眺めて、好きな散歩もならず室にすつこんで、手の冷たさを啣ちながら仕事に精を出さねばならぬ生活の苦痛をつく／＼感じてゐた。

寒さに堪えかねては、乏しい財布の底をはたいて房州に幾度か無理な旅をつづけたことがあつた。外房州には東京の冬は無かつた。涯知らぬ大洋を眺めても、其處から冷を感じることはなかつた。雲が拂はれて暖かい太陽が早春の光をさへ投げてゐるのであつた。放たれた牛がのびやかに立つてゐる。すつくと聳える暖國の樹々を仰いでゐると、それだけでも冬は無くなつてしまふ。

湘南への旅は、日曜毎と云ふ位に頻繁にやつてみた。せめて一日でも東京の冬が忘れたかつたのである。東京では冬のマントにくるまつて、未だ寒さを防

ぎ得ない初春の頃に、茅ヶ崎あたりでは、暖かい大粒の雨が桃の林に降つたりしてゐたことがあつた。

伊豆へ行つて紺青の相模の海に親しんでゐたころ、北の山々には雪が其の在所を示してゐるのに、ここの國の高い山には雪は見られぬのみか、青々としてつづく山々には春の色さへ濃く匂ふてゐるのであつた。前にくつきりと見える大島には、御神火の煙がなびいて、常夏の椿の王國が招いてゐる。町はづれの水溜からさへ温泉の湯氣が立つてゐる。何と云ふ冬知らぬ幸福な所だなど思つた。

寒さに挫けては男子の面目は立たぬが其れは壯年期の人のことであらうし、壯健な人のことである。自分のやうな感傷的で、心身の過勞につねに悩んでゐて、時々健康を壊すものには我慢は禁物である。すべての事情が許せば、寒さに怖える生活から遁れて、冬知らぬ温暖の地に後の半生の仕事に没頭してみた

いのが、唯今の願ひでない、前からの願ひであつた。

寒さの縁が盡きぬと見えて、今にしてなほ故郷の寒さの洗禮を受けでゐる。武藏野の冷よりはやや温かいが、あの空風はやはり同じく吹いてゐる。風の畏の中におかれた村では、風を遁れてみやうがない。肉體の多少の衰へを感じるやうになつた今日では、何とか次の計畫がなされればならなくなつて來た。

一所不住の心易い人生が自分に與へられるなら、自分には南紀の冬知らぬ理想郷が懷しまれる。夏の涼しい冬の暖かい黒潮の海邊が夢のやうに戀心を唆つて來る。彼の君と行くならばじやない、愛する家族と共に、あの赤い椿の咲く下で、紫紺の海を眺めたい。一段歩の土地と、三十坪の家と、暖國の果樹を植ゑ、早い蔬菜を作り、庭に花樹の枝をならべ、畑に四季の花卉を樂みたい。其れは贅澤かも知れないが、貧乏な自分のせめてもの願ひである。

こんなことを云つてゐると洞山和尚に叱られるかも知れない。しかし洞山も

やはり冬は寒かつた筈だ。

洞山和尚に或る時僧が問うたことがあつた。

「冬の寒さ夏の暑さが到来いたしましたら、如何にそれを回避いたしましたらよろしうございませう」

そこで洞山は、

「お前はなぜ寒さ暑さの無いところへ行かないのぢや」

と一本キメつけた。僧は其れが薩張解らない。

「では寒さ暑さの無い所つて、一體何處に左様なところがございますか」

と問ひ返した。和尚は早速

寒い時にはお前さんを寒殺する位寒く、暑い時にはお前さんを熱殺する程暑い、それが無寒暑の結構な處じや。」

と空とぼけた。

寒い寒いと云つてゐる時、熱い熱いと云つて苦熱に喘ぐ時、其の時こそ寒を征服し熱を征服してゐるのである。寒い時に寒くなかつたり暑い時に暑くなかつたりしては、其れは病身である。寒に犯され熱にうなされてゐるのである。寒は寒として其れに堪え得るとき寒は無くなり、熱は熱として其れに堪え得るとき熱は無くなる。苦しい時に苦に堪え得るとき苦は無くなり、貧しい時に貧に堪え得るとき貧は無くなる。

寒に暑を思ひ、貧に富を羨むのは、寒に敗れ貧に溺れたのである。無寒暑のところは、たゞ其れを忍ぶところにある。別に其の相對を求めるところには無い。唯求むべき涅槃もなく、樂しむべき樂地もない。苦を苦と忍び、貧を貧とするところに、無寒暑の樂地があり、富裕極りない涅槃の境界があると云ふ

洞山和尚の教は親切極るものではあるが、洵に萬刃の懸崖に向ふやうな、手も足も出ぬ難しさがある。和尚のこの自由奔放な活作略は、決して人を死の懸

崖に逐ひやるものではないが、其の心を得ることは到底凡人の能ふところではない。瑠璃の殿奥に輝く月で、其の眞意は遙かの彼方に瑞巖に神秘に輝いてゐる。

洞山は窮屈なことを云つてゐるのじやない。瑠璃殿奥の月は、決して人を束縛するものではない筈だ。現實を楽しむところに現實の味があると云つてゐるのである。避暑をするのもいい、避寒をするのもいい。況んや其の寒暑を楽しむところに寒暑が無くなる底の生活が一番いいであらう。

冬を好まぬ自分は、暖地の椿のもとで冬を楽しむことが出来るであらう。寒さが黒潮で拂はれるところに、冬を楽しむことが出来るであらう。それがせめてもの自分のやうなものに許された現實の無寒暑の樂園である。

四四、木に竹をつぐ (禾山解打鼓)

禾山和尚が、僧肇法師の説をとつて雲水共に提唱をして、

「習學これを聞と謂ひ、絶學これを隣と謂ふ。此の二を過る者、是れを眞過と爲す」

と述べた。修行の間は法を聞くのであつて、これを聞と云ひ、修學を了へて學ぶもののない處に至ると佛に隣るから、これを隣と云ふ。更に向上して佛の位に入るのであるが、其の時には、聞と隣とを眞に通過してゐるから、これを眞過と云ふのだと説明するのである。しかしこの説明は禪では問題でなく、他の宗に於て用ゐる教である。だから一人の僧が突如として問を發して、
「では眞過とは如何様なものでございますか」

と問ふ。和尚は、

「太鼓を打つことは知つてゐるがな」

と答へる。そこで僧は、

「では佛教の眞諦眞理と云ふのは如何様なものでございますか」

と同じ意味のことを、言葉を代へて問ひかける。和尚はやはり、

「太鼓を打つことは知つてゐるがな」

と答へる。僧はまたもや、

「即心即佛と云ふ教は云はずと知れてをりますが、非心非佛と云ふ教は如何様なものでございますか」

とまたして同じ意味のことを言葉を代へて問うて見る。和尚はやはり、

「太鼓を打つことは知つてゐるがな」

と答へる。僧は飽きもせず、又やりだす、

「眞に修行を望む人が來た時には如何様に導いたらよろしうございますか」

と、これもやはり同じやうなことを言葉を代へて問ひかけるが、和尚は、

「太鼓を打つことは知つてゐるがな」

の一天張で押し通してしまふ。暖簾に腕押しと云つていいか全く木で鼻をくくつたやうな、木に竹をついだやうな、取止めのない返答であつた

この木に竹を繼いだやうな返答は空呆けた返答ではない。眞過と云ひ眞諦と云ひ非心非佛と云ふ問ひそのものが、洵に重大なる問題であつて、其れは言語道斷、言詮の外にある。其れを問はんとする心には、其の説明を求めることによつて、何等かの形に於て其れを知らうとする意志がある。それはやがて形に捉れることになる。

其の形を得させまい、其の捉れから放つてやりたい和尚の念願が、木に竹をついだ答へとなつたのである。けれどもこの答へには廣い大きなものが其處に

伏在してゐるやうな豫感を多分に與へるものがある。しかし其れは解らない。恐らく和尚も知るまい。

歸宗和尚には石を拽く故事があり、木平和和尚には土を搬はきばす故事がある。其の禪機を轉ずることは峻烈であるが、雪峯和尚にも毬を轉ばす故事がある。しかしこの禾山和尚の太鼓には何うも及ばぬやうだ。この太鼓を打つことを知ると云ふやつは、何と云つても手強い。だが、これは一つの話柄ではない。落語でもない。勿論、木に竹を繼いだことでもない。これはこれ甘きものは甘く、苦きものは苦いと示してゐるのである。

世間の人はずつかりすると、甘きものを苦く見、苦いものを甘く見る風がある。ややともすると木に竹を繼がうと心得てゐる者も中にはあるやうだ。現實を忘れて觀念にひたるものはこの類である。

木に竹を繼ぐやうな無理は、人間世界には無用である。佛は木に竹を繼ぐ手品をするやうに思つてゐる人が多いやうであるが、佛は決して木に竹を繼ぎはせぬ。左様な力も持合せてゐない筈だ。木に竹を繼ぐやうに見えるのはそりや一應だ。木に木を繼ぎ竹に竹を繼ぐことが眞實の佛の仕事であつた。

四五、清風 (萬法歸一)

到當春になつた。頬をなでる風に何の苦痛もなくなつた。花を忘れた木草に花を誘う心地よき風が、野を亘り村を亘り山に迫つてゆく。しづくくと佐保姫の歩みのやうに穩かである。

蝶が舞つてゐる。二つ交うて舞つてゐる。風のやうに、あるひは高くあるひは低く、花に酔ふたやうに亂舞してゐる。見渡す限り菜の花が咲き揃うた。麥がすい／＼暢びてゐる。

小學校へ入學したばかりの次男坊が

「さいた、さいた、さくらがさいた」

「ビイチク、ビイチクひばりがないてゐる」

と、大聲に讀誦をしてゐる。それでいい、それで春は満點だ。そこからさへ春が生れて来るやうな氣がする。

ぽか／＼と暖い陽射が花を照してゐる。空には微な霞が陽の照を緩和するかのやうに棚引いてゐる。時々風が思出したやうに動いてゐる。菜の花の香がそれとなく風に匂ふて来る。野には今春の心が燃立つてゐるのだ。

梅は散つてしまつた。桃は萎びてゐる。櫻が春の王者のやうに獨り春を縦にしてゐる。人は今働きの手をやめた。花の饗宴に見とれてゐるのである。告天子の伴奏に亂舞する蝶の春の踊を見つめてゐるのである。

動かぬ風の幔幕が、この饗宴を醸してゐることを誰が知らう。宴終りなばと、

其の時を待つ風が、酔のほとぼりの醒めぬ中に、宴を閉づる千秋樂を奏して來ると、花はハラ／＼と枝を放れて吹雪のやうに散つてゆくであらう。蝶は慌て遁げ惑ふであらう。人は砂塵に逐はれて家にかへらねばならぬ。

五日の風十日の雨、一雨毎に季節はすすみ、一風毎に風は温んで來る。新緑の衣更へが眼の醒めるやうな緑を野にも山にも送るやうになると、人は薄い衣にひた／＼と身をかすめる風の感觸に満悦するやうになる。山吹の黄と藤の紫が、緑の單調を破る頃がすぎると青嵐がそよ／＼と野を渡りはじめぬ。

土の怪物蛙がふつつかな姿を恥しがりもしないで、頬を膨ませては、夏の讃歌を合唱する。其の合唱を強く弱く送つてくる青嵐が、軒の簾を動かしはじめると、夏はいつしかしのびよつてゐるのであつた。

空には眩い陽が輝き、雲の集塊がむく／＼と背高くのびて峯をつくり、サンサンと降る日光は、餘りの光をすべてのものから照返させてゐる。餘剰の熱と

光は、地上に溢れて、夏の景觀は其處から生れて来る。

光と熱と其の底を流れる太陽の力とが、地上に氾濫して来ると、すべてのものが、熱と光と力にうなされてゆく。地はクワツクワツと乾き、雨は夕立の猛威を振り、電光と雷鳴は、餘剰の力と光を放射する。水はあふれ、雲は天上を迷亂する。

私は砂漠の熱砂上を吹く熱風を知らない。山と木と海に恵まれた我國には、冬の寒風と秋の颱風とを除いては、風は親むべきものである。無くてはならぬものであつた。ことに熱いムツとする夏の午後などに、樹の蔭を傳つて微に訪れる、あの涼しい微風は、洵に人にとつては救ひでなくてはならぬ。

釋迦は念佛のことを清涼風と云つてゐる。地上は燬けさうな熱い印度において、其の熱の地獄を救うものは、この清涼風でなくてはならなかつた。念佛が一切の救ひであることを、苦惱の熱惱になやむことから救はれることにたとへ

たのである。

山の樹蔭に下座して、谷を出でて来る清風が世の熱惱を冷して呉れる、あのそよ／＼との訪れを受ける時、人は一觸の冷水よりも如何に其の風觴に心を傾けることであらうか。夏を忘れ山を忘れ、身を忘れ風さへも忘れて、忘我境の三昧に入ることが出来るであらう。

ここでは葉の面に光る日光も都會の夜のイルミネーションのごとく、樹上の蟬の熱鳴も心地よきステータの歌手の歌と聞きなされる。地上に落ちる日の影は正に月明にうつる婆娑たる隈にすぎない。

清風至るところ地上の樂園は所在に求め得られる。地上の忘我境は至るところに展かれてゆく。ここに夏なればこそその歡喜が悦ばれ、清風渴仰の讚佛乗の歌はいづくからも聞えて来る。嫋々たる枝を鳴らす響の響くところ佛國ならぬはない。佛土莊嚴の風よ、穢土寂光の清風よ。願はくば永遠に地上にあれ。

趙州和尚に或僧が問を呈する。

「萬法一に歸す、一は何れの處にか歸す」

と云ふのである。涼しい風が何處かへ飛んでゆきさうな熱苦しい質問である。眼前千差萬別の諸法が其の本源に於て法性の一である。眞如の一であるが、其の一角が更に何處へ歸結するであらうか。難しい。岩のやうに堅い、解き難い難問である。和尚は洒々落々と、

「俺は青州に居た時、一枚の布の衣を作つたが、其の重さは七斤程あつたなあ」と云つてのける。苦熱の中を清風がそよぐやうな答へであつた。

萬法歸一と云ふやうな問題に、更に其の一角の歸處をたづねる熱い僧には、この趙州の衣の風が如何に涼しく吹いたであらうか。萬法が一に歸すると云ふ一に捉れ、更に其の一角の歸處を探ると云ふ物好は窮屈の上に窮屈を積んで、人は熱さに窒息するであらう。萬法の歸一の一角の歸處はたづねるに及ばんじやない

か。其の一角は又萬法に歸するじやないかとばかり、衣で體をかわした和尚の手際は、いかにも鮮やかで、一陣の涼風が地上に充つる思ひがある。

ぢり／＼と和尚に詰めよつて、あわよくば和尚に泡を吹かせようと思つたのであらうが、其の和尚の衣の重さをたうとう知ることが出来なかつたやうだ。だが和尚が衣を持出したことは、其處に又衣が人の目を惹くことになる。だから其の衣を雪竇山の西の湖に棄て去つて、恰度荷物を空にした下り船が流れにつれて下つてゆく、其の船上で吹かれる清風の輕やかな心地は正に清風三昧の極樂境であるわいと雪竇は云ふ。

一切を忘れて微風の忘我境に遊ぶことは、人生の樂園でありそれは同時に佛士の生活でなくてはならぬ。

四六 雨 (鏡清雨滴)

しと／＼と小止なく降る雨である。鬱陶しい乳色の空からは陽の目は洩れぬながら、餘程雲が薄くなつた筈だが、雨は更に止みさうもない。折角暖かくなつたのに、この雨のために寒さがぶり返して來たやうだ。ゾツとする氣味悪い冷が時々見舞うて來る。

室に閉籠つて雨垂の音を聞いてゐると滅入りさうな寂しさが襲うて來る。無聊のやりばに窮してしまふ。尤もこれは雨の罪じゃあるまい。雨は降るべくして降つてゐるのである。人を寂しがらせようてな心は毛頭ないで筈ある。

それに何故に寂しい心が其れによつて引出されるのであらう。明るさを欲する人の心に暗さを與へるためか。自由を欲する人に自由を與へぬためか。それ

も其の幾つかの原因に加はるであらうが、あの滴々と落つる雨垂の音を聞いて無精に寂しくなるのは何故か知れぬ。

雨垂の音に俳味を感じた俳人もある。雨垂の音に法音を聞いた禪客もある。緩にあるひは急に或る節度を持つて響く音が、何か意味ありげに聞えて來る。天の聲か地の鳴音か、何か其處に考へたくなつて來る。虫の音にも節度があり鳥の啼く音にも節度がある。虫の聲や鳥の音が女性への性の聲であるならば、雨垂の音は何かを意味せなければならぬ。

さうしたことからは人はあの音に何かを考へようとするのじやなからうか。虫や鳥は生物であるが、雨は無生物である。だから其の音には意味はないと云ふやうなことを考へに入れてはゐない。其の生物も無生物も根本に於て宇宙のものであり、宇宙を心とすることに於ては何等の變りはない。

さうした廣大な心をもつて雨垂の音に又は雨其のものにまで心を求める人が

ある。俳人に現れた俳味はそこから生れたのであり、禪客の得た禪味も其處から生まれて來ることもあらう。

しかし其の俳味や禪味は結局、其の人の感じにしか過ぎぬのじやないか。雨垂れの音を聞いて種々な想像を逞しくしたつて、それはやはり雨垂の音に落ちてしまふやうだ。あの音を聞いて淋しく思ふのは、其の環境がさうさせるのであらう。憂鬱な鬱陶しい環境と、靜な無聊の環境がさうした心をあの音によつて一入強く打出すのじやあるまいか。

滴々と落つる水に何の心があらう 澄明な丸い玉のごとき水が落ちてゐるのである。種々な想像は、却つてこの美しき玉を傷けやせぬか。

鏡清和尚が、或る僧に問うたことがある。

「何か外で音がするやうじやが、あれは何の聲かな」

勿論和尚は雨垂の音であることを知らずに問うてゐるのじやない。百も承知

しながらの質問である。僧は正直に、

「雨垂の音でございます」

と答へる。ところが和尚は承知しない。

「人と云ふものは主客顛倒して己に迷ひながら物を眺めてゐるな」

と出て來た 僧は怪訝な顔をして、

「私は雨垂を正直に聞いたまを申し上げましたまですが、和尚はあれを如何様に聞かれましたか」

と突込んだ。和尚は

「實は俺もな、何かあの音に他の意味があるのじやないかと己に迷ふことを厭ふのあまり、すつての事で迷ひさうであつたのじや。その迷の中に自在を得るのじやな」

と正直なところを述べると、僧は、

「然らば和尚が仰しやる、己に迷ひながら、物を逐うて、しかも自在を得ると云ふ境地は何んなものでありますか」

そこで和尚は、

「自然を離れて悟ることは未だ容易じやが、自然の中に居て自然を生活することとは却々容易じやないよ」

と眞の悟境を吐露する。迷悟の世界をこえて、迷悟の世界に處することは並大抵ではない筈であつた。

人が居ない堂があるとする。今其處へ雨が降つて居る。誰あつて其れを聞くものは無い。唯雨が降つてゐて雨垂の音が無心にしてゐるばかりである。其處には悟も無ければ迷もない。雨垂の音ばかりしてゐる。

あの僧が和尚から訊かれて雨垂の音じやと云へば迷ふてゐると叱られる。雨垂の音でないと云へば現實に叛くことになる。其處には言語に絶した世界が横

はつてゐるのである。

如何なる音を聞いても其れを思慮分別する心に於て充分なる修練が積まれたら、心が亂れることが無いであらうと想像してもいいやうだが、それもやはりいけない。其處には物と心との對立がある。

さうした物や心の對立や雨や人の對立を一切泯亡してしまつた處に眞實の世界が啓かれてゆくのだじやないか。そこに眞實の雨が降り雨垂があるのだじやないか。雨を強ひて耳で聞かうとする心がいけない。雨の香を嗅ぎ、雨の味を嘗め、雨の感觸を擅にして、はじめて雨の眞味に徹することが出来るであらう。

雨は降つてゐる。雨の一面を眺めて雨垂の感傷に耽ることをよさう。雨は無心に降つてゐる。雨を己に打出することによつて、雨の世界の雨味を味うことが出来れば雨垂の音も生きてこよう。

四七、無用の用 (雲門六不收)

自分は時々自分の存在を疑つて見ることがある。ポツネンと世の中に生れて、世の中のものを著、世の中のものを食ひ、世の中の家に住んで、そして別に世の中に其れだけの報酬をしてゐない。それでよろしいかと疑ふのである。

世のためにと人の云ふのを聞くと、自分には時々心の暗くなるのが感ぜられる。社會のために、國家のためにと教へられる時も、社會のため國家のために身を犠牲にした人の事を聞く時も、何かこれと云ふ事をせないうで、無爲に世を送つてゐる自分が情なくなることが度々ある。

唯暮してゐればそれでいいと云ふ人がある。金を儲けて食つてゐればそれでいいと云ふ人がある。それでも間違は無いであらう。經濟文明のもとにある現

代に於ては、金を儲ける人が世の中で一番偉い人かも知れない。金を自由に驅使して大いなる事業をする人が更に偉い人であり、國家社會に盡す人であることは間違ないやうだ。

現代の近代的尖端をゆく文化はいかにも美しい。其の文化を構成する人々は金を儲け金を驅使する人々である。ネオンの光り、ジャズの音、ラヂオやレビユーやダンスやバスやタクシーや、高層建築に現はれる近代的なるものは、すべて近代人の感覺から生れて来る。其の感覺は、金を儲け金を驅使する人々の好みに應ずるものである。

風を切つてゆく近代人の威容を見てゐると如何にも時代がかつた自分と云ふものが省みられて来る。間に合せの洋服は纏へど、下駄代りの靴は穿てど、近代から遙かに見棄てられた自分と云ふものが、敗軍の將のごとく、塵塚ちりづかに棄てられた埃のごとく、最早現代に生きてゐる用事がなくなつてゐるのじやないか

とさへ思はれて來ることがある。

金を儲けることを教へられなかつたこと、金を儲けることを學ばなかつたことが後悔せられるやうな氣になることもある。田舎に暮してゐてさへ収入の高さが、人の格の高下を示すかのやうに素朴な人までが考へるやうになつてゐる。金を儲けることを知らずに兎に角食つてゆける自分と云ふものが不思議だと共に、田舎までが住みにくくなつたことを痛嘆せしめられる。しかし痛嘆するところがすでに時代がかつてゐるのであらう。

金には集る性質があるらしい。集散離合してやまぬやうな一方に益々一箇所に集積する素質があるやうだ、蜜蜂が其の巢に集るやうに。それと共に人もやはり金のやうに金の集るところに集る素質があるやうだ。

近代文化の基礎は金にある。金の集る所から生れて來る。其處に人が集積する。近代は都會に其の生命を持つのは事實である。都會に人が集つて、人の上

に人が重なるやうになる。高層建築は何處迄天に暢びてゆくやら知れぬ。人と人とが込合ふ。其の磨擦面を緩和するところに近代の文化は生れて來るとも云へるであらう。

交通機關の發達も、通信機關の進歩も、娛樂機關の股賑も、ひとへに人と人との磨擦を防ぐものでないものはない。便利と云ふのは、磨擦面の緩和を云ふに他ならぬ。

さうした都會の生活は、近代人の嗜好に適つてゐる筈だが、かかるものの嗜好を忘れてゐる自分は、やはりどこまでも時代ものであることに間違はなささうである。レビューを見ても解らず、洋樂を聞いては正に猫に小判であると云つていい自分は、近代の寵兒である金からさへも見放されてゐるのである。

金を儲けることはやがて社會を生かし國家を富裕にすると考へられる以上、金を儲けることを知らぬ自分の如きは、社會國家の寄生木ヤトリギであつて、一つの邪魔

物とならざるを得なくなる。正に愧死していい筈である。しかし未だ死ぬ氣は起らぬ。

世間離れのした仕事をしてゐると、實際、世の中から遠くなつてゆくやうだ。學問と云ふやうな 思索と云つたやうな生活をしてゐると、其れ自體が悠久なるものを對手とするが故に、春日遅々と云へば何處か長閑な生活のやうだが、忙しい近代の心から次第に遠のいてゆくやうである。金に見棄られてるのも當然だと首肯うなづかれるのである。

自然とは何ぞやと云ふ問題、自然の形相に就いてと云ふ問題や、歴史學や文學や思想史を仕事としてゐると、時々氣が遠くなるやうなこともある。寧ろ近代を捨離しりぞして、遠く近代を忘れたところへ遁れたいやうな氣もするのである。

しかし象牙の塔に閉籠つて、近代を白眼視しようとするやうな意志や、近代に對する呪ひは少しも持つてゐない。からと云つて近代に秋波を送つて近代に

追従しようと思ふ心も更に持合せてゐない。むしろ近代を構成し過去を構成しやがて未來を構成するところの歴史的事實に深い關心を持たずにはゐられないのである。

片々として移りゆくものは何うでもいい。其の移りゆくものをして移り行かすむる力に心を寄せ、其の變化極まりない移行の舞臺である悠久なる自然が自分の中心的關心事である。國家社會に何等酬ゆることを知らぬ不忠な自分も、正に愧死せずして、生を欲する所以はここにある。

如何に近代に遠ざかり、如何に現代に無關心な仕事をなしつつあつても、やはり現代に生を有し現代の息を呼吸する以上、自分の仕事は決して近代に無用なものではないであらう。現代に背くものでもないであらう。

現代がかくせしめ近代が其の必要によつてかかる關心を自分に與へたに違ひはないであらう。現代に生を享けて、其の生活が現代に背くものであつても、

其れは現代の他のものではなくて、やはり現代が生んだ幾人もの子の中に數へられなければならぬ。

けれども現代の子、近代の息子としては正當の子ではない。繼子である。現代を母とし近代を父として生れた子ではない。悠久なるものを父とし現代を母として生れたのだから、やはり繼子である。繼子なるが故に苦勞をする。目の目も見ずに、眩しい近代の下に、其の蔭にやつと生をつないでゐるいちらしい子である。

しかし繼子が成人すると、甘やかされた子とは違つて太い大きい線を時代の前に引くことがある。世の中から無用扱ひにされた繼子が、却つて世の中以上の仕事をするかも知れない。無用の用が、世の中の用以上に大きく、大切であることを忘れがちな近代人に知つて頂けば、不忠な自分の生存も何程か其處に意味を持つであらう。

雲門和尚に僧が質問する。

「如何なるかこれ法身」

和尚は、

「六不收」

と答へる。

宇宙の眞理とは何であるかと云ふのである。如何にも暢びりした質問と聞えるであらう。それに對して和尚の答へは更に暢びりしすぎてゐる。六不收、何だか薩張解らない。時代はなれのした應答である。近代には全く無用の葛藤かも知れない。

六不收と云ふ答へは、六の文字に捉はれることはない。六は一二三四五六、何んでもいい。左様な數の制限を示してゐない。不收の文字が示すやうに、算用や言説の外にある。近代や古代や未來の外にある。達磨も其れを數へ切れな

かつた。その達磨が少林寺に於て弟子の神光に其れを傳へたとも云ふし、達磨は其のまま印度にかへつたとも云ふ。印度を尋ねても跡は知れない。達磨が傳へたの、傳へぬの詮策なんか何うでもいい。其の達磨は何處へ行つたのでもなし。現實にここにかうして宇宙萬象としてゐるじゃないかと雪竇は云ふ。

現代と何の交渉もない一問答である。けれども現代に於て何の用もないこの一問答が、現代を生す無用の用をなしてゐることに氣がつかないでは寧ろ近代こそ笑はるべきである。ネオンの光り一つ、ラジオの音一つも、法身を離れて存在するものではない。近代の高層建築が、空中樓閣でない限り、法身の實用によつて築かれた法身の現れでなくてはならぬ。人の考へは法身の外に出ることはない。法身の間に人は其の生を繰返すに過ぎないのである。人を中心として見れば、法身は隠れる。其處に法身の無用がある。法身を中心として見れば人は隠れる、そこに無用の用が働く。

近代文化は人が中心である。人が中心である時には金が用をなす。人を離れて法身が働く無用の用の世界と、其の文化が待遠しいやうな氣がするが、人を離れて又法身も無いとすれば、人生に法身を生す無用の用を待望することは、人生の宿命かも知れない。

四八、茶 (招慶煎茶)

煙草も不思議なものだが、茶になると更に不思議だ。ココアやコーヒーは底が知れてゐる。あの砂糖の甘味と云ふ味覺によつて誘はれる興奮劑だが、茶には砂糖も入れず其の儘あの苦味を味はつて、しかも其れが止められない。其ればかりじゃない茶道と云ふやうな大きな文化をさへ惹起してゐるのである。洵に得體の知れないのが茶と云ふ怪物だ。

茶が薬品として輸入せられ、貴顯の間に用ひられたことは随分古いが、茶樹がはじめて傳へられたのは榮西禪師によつてであると言ふ。禪師が入宋して禪を傳へる時支那の禪院で坐禪の睡氣醒しとして盛に用ゐられた茶を一緒に傳へる必要を感じて我が國に傳へられたものと云はれてゐる。

其れが拇尾の明恵上人によつて洛陽近く移植せられ、足利將軍義滿の愛用から宇治に茶園が設けられ、普ねく國中に愛用せられるやうになつたと物の本に書いてある。山城の宇治が茶によつて名をなす所以が其處にある。ところで榮西の喫茶養生記を見ても茶の功德を述べてゐるのみで、未だ茶道と云ふやうな大したものが生れる様子も見えてゐない。

茶道は茶禪一味の精神から生れ、六代將軍の義政の頃奈良稱名寺の僧珠光に始まり、堺の紹鷗を経て千の利休に傳へられて大成したものださうだが、其れがかくなるについてはさう簡単に偶發するものじゃなくて其處には充分なる

理由が無くてはなるまい。

其のためには時代の推移と茶との關係が考慮に入れられなければなるまい。禪と云ふものに對しても坐禪の一度も修めたこともなし、茶道と云ふものについてでもてんで素養がないが、文化の推移については多少考へてみぬでもない。

室町時代と云ふ時代は中世の暗黒時代だと云はれてゐる。暗黒時代と云ふのは文化らしい文化のない時代と云ふ意味であるやうだが、それはちと辟目じやなからうか。西洋の中世も暗黒時代と云はれてゐるが、其れには理由がある。キリスト教がローマンカトリックとして法王の支配の下にあつて、其の教權を擅にする。其のために人間中心の文化がひどく壓迫せられたので、其處に古代の自由なる文化が影を潜めることになる。輝かしく人生主義の文化が教權の蔭に隠れたので如何にも暗黒時代であつたと云ふに相應しい。

我が國の中世にはさうした意味の暗黒はない。表面戦亂がつづいて如何にも

文化が微であつたやうであるが、其の實其の内面に於ては未だ嘗て見ない高度の文化が醗釀せられてゐたのであつた。社會の表面に其れが廣く強く作用しなかつたから、史家は其の表面の皮相を擱んで暗黒時代の汚名を與へたのであらう。

無用の用の文化は世人の眼界に入り悪い。人間はしまつて以來のこの高度の文化は、普通一般の社會と没交渉となりがちであるから、其れが一般社會の勢を視點におく見方からすれば、この時代を暗黒時代と名づけても強ち無理でないと言つてもいいかも知れぬ。

平安初期の文化が現實思潮の時代であることは天台眞言の二宗の旺盛からも察せられるが、其れが中期になつて理想主義的に次第に轉換してゆく。道長の淨土教的思想が其れを證明する。しかも平安末期になるに従つて理想主義が高潮し、其處に正に法然上人の淨土宗創立となる。

鎌倉の時代は其等の思想的二潮流の成算期であつた。理想を現實に生かし、現實を理想によつて淨める時期であつた。親鸞や道元や日蓮が如何に其れを具現したかを見ても明かである。洵にこの時代は思想的に劃時代的光榮ある時期であつたと云つていい。

鎌倉に於て統一せられた思想は、其の次の時代に於ては、其れを實踐すべきであつた。其れを生活の實際に移さるべきであつた。室町時代はかくして其處に生れて來る。現實主義でもなく理想主義でもない其れを統一した生活は、人生の眞に生きる生活でなくてはならない。其處には深く道或ひは思想と云ふものが其の背景をなし、しかも多なるものを一にせんとする意思が強く示されてゆくことになる。人間的には淋しい生活が其處に展開してゆくのは必然であり、思想が時代の基調をなして自然と高度の文化を形成してゆくことにもなる。

室町の文化が、かかる事情から生れて來るのであるが、其の基調たるべき親鸞・道元、日蓮の思想が文化の表面に現れず臨濟宗が獨り其れを占むるやうになつたのは、其處にも事情がある。親鸞・道元、日蓮の宗教は實人生の生活に深く喰入るのであつて、其れが文化を形成する餘剰を持たぬのである。同じく禪宗と云つても道元の曹洞禪は默照禪で、其れはすぐ様生活であつて、文化の事業には參する餘裕がない。然るに榮西が傳へ其の他の人々によつて次第に傳へられた臨濟禪は待悟禪であつて、公案を透過する修生の仕事がある。公案は無限である。無限なる公案解決の仕事は、遂に文化を創造する餘裕となり、公案の解決其れ自體が獨自の文化創造であると云つてもいい。其處に獨自の室町文化が生れることになる。

道を中心として生活を統一されたる思想の坩堝に入れられた室町文化は、人間の生活を次第に素朴に導くと共に、あらゆるものを一に統一せんとする意志

を多分に示して來る。禪の簡素其のものの生活が時代の趨勢として時代をリードするのも其のためではあるが、生活の環境までも一に統一せんとす動向が見えるのである。人間的なるものを、其の雑多なる要求より次第に一に統一することは、理想と現實の統一より生れたものであるが、それはやがて自然と人の二を一にするまでに深く進まんとする傾向さへ窺はれるのである。自然に對する深い嗜好が濃厚に表れて來るのが其れである。

環境の雑多の統一は種々の環境に示されて來る。衣食住の生活の三要素には其れが特に著しい。平安時代の雑多なる衣服と其の色彩が如何に單一化せられて來たか。平安時代の食物が如何に素朴になり來つたか。平安時代の住居が如何に單純になり來つたかは今更云ふ迄も無からう。

あの眼もあやな色彩の嗜好は、次第に澁い色に統一されてゆく。絢爛を極めた大和繪は、一轉して水墨繪の墨の一色になつてゆく。其處には色彩が無くな

つて、色彩の本源である明暗が繪をなすに至つてゐる。色彩鮮かな平安の建築は、金閣寺に來ると色彩の根源である色澤ある黄色に變り、其れは更に銀閣寺に來ると、其の最後の色である黄色をさへ取去つて光澤ある白色の無に還つてしまふ。金閣寺の建築さへが四方四面の平面をもつ建素の根本にかへり、立面の三重は立面の高さの調和から生まれるまでに至つてゐる。銀閣寺の二層は平面の小より來る必然の結果であらう。

平安の展望式庭園は、この時代に廻遊式庭園に變つて來る。其處には今まであつた、見る者と見られる者との對立が無くなつて、自然と人が一になる。寢殿造りの棟々が書院造りの一棟に收り、素木の木材が木の自然に近づかしめる。謠曲は従前の雜多な文學と歌謠を統一し、其れが舞臺にのせられる能樂になると、あらゆる音樂、所作を統合して餘りがない。

奈良の稱名寺の珠光が茶と禪と一時に味はつて茶道を構成するやうになつた

のも、この趨勢に乗つたものと云つてよからう。茶がもつ持味は不可解な苦味である味覺である。味覺と云ふものは人によつて好惡があつて、一概に何の味覺が味覺の中心であるかは判断に苦しむが、甘さが味覺の中心であるやうにも考へられず、辛味や酢味が味覺の中心とも勿論考へられぬ。尤も味覺の中心となるものを考へるのが間違かも知れないが、其れは味覺の深さから考へられぬこともないやうだ。

甘や辛や酢味は味覺が浅い。味はつても味はつても底が知れぬものは先づ苦味だと云つていい。しかも普通の茶の苦味でなくて、得體の知れない深い茶の苦味である。苦味を通じて甘さも現はれて來る。とろつとした何とも云へぬ醜味もある。味はつてゐればゐる程苦味が無くなつて、得體の知れない味覺の廣い世界を展開してゆく。恐らく其れが醜味と云ふ奴であらう。

珠光が味覺の世界の統一を茶によつて得たことは大なる創造と云つていい。

しかも其の得體の知れない茶味と、時代生活の統一者であり又得體の知れない禪味なるものと寂び澁味の一點にこれを融合したことは、更に偉大なる創作と云ふことが出来るであらう。茶を生活の實際に生かし、思想の實際に生かす、其處に茶道なるものが生れるのであるが、これこそ正に室町文化の特異性を最も高く最も明確に示すものと云ふことが出来る。

茶室建築が維摩の方丈を生かし禪の最後の住居の様式を如實に示すものであり、茶室裝飾が禪の素朴を其のまま傳へ、茶庭が住居によつて損はれた自然を生かし、茶禮が禪生活の行儀を移し、茶料理・茶菓子・茶器のすべてに於て、磅礫として宇宙に遍滿し鍾つてこの一點に歸する禪を生活の上に生かして餘りがない。

自然を心の坩堝に入れて、其れを再現する禪の生活は、自然を茶味の一點に生かして其れを生活に再現する茶道藝術と一味に融合することは極めて自然で

あつて、其處に茶禪一味の、思想が成立する。

或る意味から云へば、禪の形式化が茶道によつて救はれたとも云ひ得るであらう。さう考へて來れば茶道は禪の更に一進展より生れるとも云ひ得ようか。千の利休が方丈の茶室よりも更に小さく二疊の茶室を盛んに使用してゐることは、住を極限に押し詰めて、自然を更に強く生活に生かすことを意味すると見られるので、ここにも其の進展の意味が示されてゐると見ることが出来るであらうか。

茶道が禪によつて生れ、更に禪以上に生活の上に強く其の歩を進めて行くことは、云ふ迄もなく其處に茶道文化を形成するが、利休以後、更に今日の茶道を見ると、遺憾ながら茶道が邪道を辿つてゐるやうな印象を與へるものが多い。金の脚光を浴びて道具の數奇に浮身をやつすことが、閑人の閑葛藤として茶道が一の遊道具となつてゐる感が深い。茶道復興の聲が巷に聞えるが、其のため

には其の素朴なる時代の精神に還らなければなるまい。ルーテルがバイブルに還れと云つたやうに。

支那泉州の知事をしてゐた王太傅が、或時泉州の招慶寺で煎茶をやることになつた。其の席には將來支那禪界の雄となるべき人々が集つてゐた。明招みやうせうや朗上座らうじやうざが其れである。ところが朗上座が明招のために茶を汲うと思つて茶瓶を把つたが、何のはづみであつたか、其れをひつくりかへした。そこで王太傅はすかさず朗上座に向つて、

「茶爐の下に何があるぞ」

と急所をついた。朗上座は正直に、

茶爐の下には棒爐神があります」

と答へた。棒爐神と云ふのは茶爐や火鉢の脚のところに、其れを押上げるやうに脚に擬して作つた人形である。あれは棒爐神と云つて、爐や、其れに掛けた

ものを返らぬやうに護る神である。朗上座が棒爐神と答へたものだから、王太傅は威丈高になつて、

「棒爐神が護つてゐるのに、何故に茶瓶をひつくりかへしたか」

と詰り寄せる。朗上座は困つて、

「長のお仕へも一つの失策でおじやんになるやうなものです」

とやつた。王太傅は、朗上座の話すに足りないのを悟つて、フイと其の座を起つてしまつた。この問題は茶瓶の轉落を機として、もつと大きいものを問題としてゐるのである。朗上座が茶瓶をひつくりかへしたのを無常と解して王太傅が話を進めてゆく。茶爐の下に何があると問うたのは、生死無常の根柢には何があるかと云ふのである。そこで朗上座が棒爐神と云つたのは生死無常の根柢は眞如法性だと答へたことになる。王太傅がつづいて然らば何故にひつくりかへしたかと問うたことは、然らば何故に眞如法性が煩惱生死の無常を惹起すか

と問うたことになる。ここまで来れば朗上座も煩惱即菩提か生死即涅槃か或は一切を投げすてて本来の面目を露呈するか何とか答へなければならんところであつたが、無機用にも百日の説法屁一つと云つたやうに答へをしたのでは、眞如法性が一念の迷ひによつて生死無常となると云ふ意味になつて、薩張なつてゐない。そこで王太傅はフイと座を起つたのであつた。

そこでこの様子を見てゐた明招は

「朗上座よ、お前は招慶和尚の下で手厳しい接化を受けてゐながら、つまりぬ事を云つて何をしてゐたのじゃ」

と、たしなめた。朗上座は

「然らば、お前だつたら何うする」

と喰つてかかる。明招は、

「お前の心に隙があつて、棒爐神が祟つたな」

俺の心には隙なんか無いよと云ふ挨拶である。

雪竇が後に著語して、俺が其の座に居たならば、茶爐を足蹴にかけてやるのにと無念の齒を喰しやる。

王太傅の質問は風を切るやうに鋭い。朗上座のときは、なんだ其の鋭峻なる刀尖には太刀打がならぬ。そのみではない、側に居ながら明招の片目は何うしたのだ。獨眼龍も牙と爪を使ふわけにはゆかなかつたのか。俺ならあの茶爐を脚蹴にかけるのじゃ。さうすれば、龍が牙をむき爪を開いて、黒雲が生じ電光が光り雷鳴が耳を劈き、大雨沛然として地上を打ち、逆水渦巻き、白浪滔天の渦は幾回となく捲くであらうに、と雪竇は相變らず切齒扼腕する。

一の茶事にこの峻敏な叡智が動いてゐる。茶事が茶道として生活底に喰入たものなら、一日の生活を生活の眞剣なる叡智の上に生かさねばならぬ筈だ。閑つぶしの茶室の開筵や、金持道樂のお茶事は飯事まいごとにしか過ぎないのぢやないか。

茶道復興のこの時、其の精神の復興が何より大切であらう。ルネサンスが人間の復興を根柢としたやうに。

四九、光風霽月（透網金鱗）

光風霽月、洒々落々と云つたやうな生活が出来ないものかと何時も考へてゐる。いや願つてゐるのである。ただ漠然とさうした生活をするのではない。自然の心を誤魔化してさうした生活の眞似をするのではない。充分なる心の餘裕を持つて、如何なる事態が偶發しようとも、少しも動ぜぬだけの充分な心の餘裕によつて、光風霽月、洒々落々の生活が出来るのであるが、さうした生活が願はしいのである。

禪宗の和尚を見ると、よく太つて元氣一杯でよく哄笑する。ああした生活が欲しいのである。其處に禪に對する自分の一種の憧憬が生れて来る。尤もこの憧憬は其れのみによるのじゃないが、兎に角禪が常に自分の心に考へられてゐるのは、其の故でもある。

あの樂天的な生活が長の修行によつて薰成せられるのであらうが、其處には又他の原因もあるやうに考へられる。獨身であることや、物質的に淡泊であることや、それに物質に恵まれてゐることや、其の行動が自由であることが其の原因の一半であるやうに思へる。

勿論近頃はさうした和尚が次第に減つてゆくやうだ。他宗の人じゃないかと思ふやうな禪宗の和尚らしくないのにもよく出會す。獨身者が次第に無くなつて、家庭的となることは、時代の趨勢とは云へ、禪の面影が薄くなつて行くやうで淋しい氣がする。

禪を除いての他宗では、高德か裕福なる寺院の僧侶を除いては、殆んど世間

生活の苦杯を嘗めないものがないらしく、苦惱の心がゲツソリと頬のやつれをせてゐる。それでも一般の俗人よりは多少深刻さが浅いやうで、生活戦線の勇士に較べると多少ノツペリとした處がある。其れは最後に貧しくとも寺院が生活を保證すると云ふ餘裕から來る和みであらう。

出家は、勿論在俗の宗旨でも出家の心を忘れることは出來ないが、少くとも僧侶と云はれ出家と呼ばれる以上、其の生活が世上のそれより貧しくとも毅然たるものであつてほしい。出來得るならば禪の和尚の潑刺たる元氣とあの哄笑が欲しい。

寧ろ生活のために苦しむならば、僧界を出家して一俗人となり、俗の中にあつて出家の心を失はぬ底の高明なる態度が正しいやうな氣もする。現代の寺院なるものが寺院としての第一義を失ひ、僧侶は僧侶としての第一義を失ひつつあることは事實であらう。信仰の結晶が寺院を創り法に生きるものが僧となつ

て法を維持するのである。その第一義が遠く失はれて、僧は其の生活にさへ苦しむに至つては、先づ第一に僧侶的に破綻の淵に臨んでゐるのである。信仰が經濟をも維持してゐた頃を思ふと其れだけでも隔世の感がある。

新時代の宗教は、其れ等の失はれた第一義を復興するところから現はれなければならぬ。古の傳統を取戻すのではない。傳統せざるを得なかつた、滅びんとしても滅びなかつた其の精神を再び明かにすることである。

其のためには物の復興ではなしに、心の復興が指導的位置におかれなければならぬ。宗教は時代によつて新しくせられなければならぬが、其の生命は永遠に渝ることはない。渝ることがないのみならず、生々として恒に新なる生命を創造してゆくものである。二千五百年前の釋迦の人格が、一大佛教を展開したやうに、一の生命が永遠の創造をつづけてゆく。展開に展開を重ねて涯知らず延びてゆくものでなくてはならぬ。

其の生命のたえざる創造はやがて人によつてなされてゆくことに氣づかれるであらう。宗教の進展が人を得ること實にしかく大切である。宗教の復興が叫ばれてゐるが、先づ人の復興が其の出発点となることを忘れてゐはせないか。人の復興は人生の生活に徹して、其れを法の上に生かし得る底の人を得ることにある。

禪の和尚のあの潑刺たる元氣と、あの哄笑を取戻すことにある。ゲツソリと落ちた頬に肉を盛り、細くなつた心臓に活を入れて、光風霽月、何の怖るることなき生活に徹することにある。

三聖和尚が雪峯和尚に參問して云ふ。

「網を出でた魚は何を食物としたらいいであらうか」

そこで雪峯は、

「お前さんが網を出てから、お前さんに答へることにしよう。」

と答へる。三聖は、

「お前さんは千五百人の雲納の大師匠じゃないか、それに俺のこの問ひに答へられぬとは可らしい」

と詰めよる。雪峯は、

「俺は寺の仕事が忙しいてな」

とアツサリ答へてのける。

三聖和尚の問ひは、修行や悟やと云ふ網を出でて證悟の世界に入つたものは、坐禪や題目やの食物がなくなつて平穩無事の生活をするようになるが、それからは何うして暮せばいいかと云ふのである。

これに對して雪峯は顔を洗つて來いと云つたやうな挨拶をしてゐる。兩和尚は同格の豪の者だから、雪峯も三聖を前において、よくもいつてのけたものである。然るに三聖は黙つてゐない。

突如として、お前は千五百人の大師家でありながら、俺に返答が出来ぬかと、痛い處へ刀尖を突込む。そこで老獺なる雪峰は、寺の仕事が忙しいと煮ても喰へない返答で其れをハッシと受けとめる。

この兩雄の問答は極めて鷹揚であつて、綽々たる餘裕が其處に溢れてゐる。宮相撲の肩の凝るのとは違つて、常陸山に梅ヶ谷の取組をみるやうな藝術的な甘さがある。

三聖和尚は充分な修練を経た和尚で、禪と云ふやうな水にさへ滯つてゐるやうな魚じやない。天地を搖し地を拂ひ獅子奮迅の勢ひで、千尺の大鯨が潮を蹴るやうな扮装で詰め寄つて來るのを、雪峰和尚も去るもの、一聲の雷鳴に天地が崩れるやうに其れに對陣したかと思ふと、寺が忙しいとて、其の雷鳴につれて大雨沛然一過の後、清風天地を拂うやうに、あとは光風霽月、一片の雲も止めぬ美しさ。遺がに天下の名匠で、跡をとどめない。

この光風霽月が教界の人々に取戻されなければ宗教復興は龍を描いて點睛を忘れたことになる。そは兎に角、人の生活にこの餘裕が何より願はしい。

五〇、長者窮子 (塵々三昧)

長者と云ふ言葉には二つの意味がある。一つには徳望の高き人であり、二つには金持である。凡らく其の根本に於ては徳望の高き人であつたであらうが、現今に於ては、寧ろ金持の特有語となつてしまつてゐる。其れ程近世に於ては金と云ふもの、物質と云ふものが、高き位置を占めつつあることが考へられる。金持の長者と云ふことは人々の羨望に價するけれども、昔の金持の長者の話は一つとして、其の滅びたことを物語らないものはない。紀文大盡と云ひ奈良茂と云ひ淀屋辰五郎と云ひ、或ひは其れよりも古い金持長者の話は、榮華久し

からずと云ふ話として残されてゐる。

人と生れて分限の限を盡すと云ふことは痛快なことかも知れぬし、千萬長者となれば、其の身一代でも構はぬ、死後は奈落の底でも構はぬと云ふ人があるかも知れぬ。それでも結構である。

併し人の眞實に欲するものは何であらうか。凡らく我身の愛に及ぶものはないであらう。金持長者を羨むにも我身の享樂のためではないか。地位を欲し名譽を欲するのも間違なく我身のためである。社會を愛し家族を愛するさへも其の根柢に我身の愛が横はつてゐることを考へなければならぬ。世のために一死も辭せぬと云ふ其の中にさへ我が世のためと云ふ我が動いてゐるのである。

我を愛することは決して個人主義ではない。個我的な我を愛することより一歩を出で人類と云ふ大いなる我に迄伸張し得る我である。さう云ふ我が個我的な我を殺すことがある。けれども其の我はやはり我を愛することを捨てた我で

はない筈である。

人は我を愛してやまない。人の願ひは我愛の深からんことに終始することは間違ひがない。然らば我を眞實に愛することが如何にして其れが充されるか。物質に満足することにより充分であるか、名譽に満足することによつて充足せられるか、地位によりて満悦し能ふであらうか。

皆然らずである。かかる外物によつて満足し得ることは、たとひ其れがなし得ても、其の人の生命のある限に於てのみで、必ずや深く考へる人に於ては、かかる一時の満足に充足し能はぬ筈である。如何なる意味に於ても人の最後の愛は生命の一點に歸せなければならんことは、誰しも否むことは出来ない事實である。

生命の愛を思ふものは、更に生命の長きを思ひ、其の永遠を思はぬものはない。結局人の欲するところのものは永遠の生命であると云ふことに歸する。永

遠の生命は金によつて購ふことは出来ぬ。地位や名譽によつても贏ち得ることは出来ぬ。唯それは道に於てのみ求め得るのである。

道とは何ぞ。久遠劫の古より盡未來際に通ずる生命の大道である。無常生死の世界には道はない。刹那に生じ刹那に没するところには道の妄想はあつても、眞實の大道はない筈である。個々の末とほらぬ小徑はあつても、久遠に遠白くつづく大道はあり得ない。釋迦もゆき孔子もゆき、達磨もゆき親鸞も道元もゆく道は唯一つの生命の大道である。其處には過去もなく未來もない。時の流れがない。時を流れとしてみるところに道と云ふ長いものが考へ得られるけれども、時を流れと見ないならば、すべてが同時である。禪の有時がそれを意味してゐる。

釋迦も達磨も親鸞も道元も、一切の人々の生命は、生あるも生なきもすべてこの道の樂園に集ふてゐるのである。だから、この樂園を法性と云つてもいい。

法性の眼に見えぬ樂園を背景として、吾々は生をつづけてゐるものである。法性を長き時の流れに見て、生ある人として、吾々は、其れを道と云つてゐるにすぎないのである。

法性の樂園は生命の世界であるが、其れは人間世界に於ては徳として現はれて来る。功德無量の法性が人間生活に於ては、徳と云ふ名に於て其の實質を示すのである。ところが道徳と云ふものが人間生活を窮屈にするやうに考へてゐる人がある。修身と云ふことを、如何にも他人行儀に思つてゐる人がある。自己の魂の故郷を忘れた人の考へに往々其れがあるやうだ。

徳と云ふことは、道と同じものであるから道徳とつづけて云はれてゐるが、徳をのりと訓じてゐるところに深甚なる意味が認められる。のりは佛法の法と同じ意味に考へられる。宇宙の規範であり一切の根元である。故に吾々は徳を離れて一日の存在もない。道を離れて一時の存命もない筈である。孔子が道は

須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず、と云はれた。然らば道とは何ぞと云へば至れる哉である。そは法性である。言語道斷である。言詮の彼方にある。しかも吾々は其れを生命として生活しつゝある。

吾々が日々の生活に於て其れが考へられてゐぬのは、氣がつかないばかりである。暗黙の中に輝きつつある太陽が眼に入らぬのである。道を離れずして歩みながら、しかも道を知らぬのである。徳の中に泳ぎながら、魚が水を忘れてゐるやうに忘れてゐるのである。

法華經の信解品を讀むと、ある大福長者の息子が家を出でて乞食になつてゐる。しかし自分は長者の子であることは少しも知らない。親は其の子を心に忘れる暇はなかつたけれども、子は其れを知らずに路頭に迷つてゐるのである。然るに親の慈悲が、つゝに長者の子であることを知らしめ、やがて一介の乞食が長者の家をつぐと云ふ譬喩が描かれてゐる。

この長者窮子は今日の吾々ではあるまいか。法性の中に住みながら法性の親を知らないで巷に迷ふてゐるのじやあるまいか。道の中を歩みながら、しかも道に叛かんとしてゐる痴人は誰あらう現實の自己じやないか。

或僧が雲門和尚に

「如何なるか是れ塵々三昧」

と問うたことがある。塵々三昧と云ふのは釋迦の悟の内容を示すと云はれる華嚴經の中に説かれてゐる。この大宇宙が其の法性の世界に於ては一個の極微の塵の中に無量に收め得ても、其の原形を損せずして存し得ると云ふ。大小廣狹を絶した世界の消息を傳へてゐるが、其の心を自己に得ることが塵々三昧である。即ち法性に生きることである。ところが、この僧が如何にも其の華嚴の精神を得たごと思ひ、自己が法性の中に住みながら、塵々三昧と云ふ特異であるものが別にあるかのごとく、法性を忘れて鼻高く和尚に質問したのである。

そこで和尚は、

「鉢の中には飯がある。桶の中には水がある」

とアツサリやつてしまふ。何が珍らしいのじやなと云ふ返事であつた。

この和尚の返答は何とも云へぬ味がある。如何なる多辯の者でも、飯の味を云ひ盡すことが出来ぬ。飯の味や水の味は萬語を盡しても云ひ能はぬと同じである。北斗星は北天に輝き、南極星は南天に光つてゐる。鶴は脚が長く、家鴨は脚が短いままで、其れで充分である。と云つてすべてが其の位を守つてゐるのみが法性の相じやない。時には白浪天を衝くことがある。けれどもこの静は、この動によつて破れることもなく、この動はこの静によつて損はるることがない。この間の消息は言はんとし言ひ得ず、しかも止めんとしても止め得ないものである。法性の世界は言詮の彼方である。しかも吾々は其れを遁れんとしても遁れ得ない此の世界にある。この世界其のままが法性の偽らざる表現である。

る。

然るに其れに何等かの説明を加へんとし、其れを信ぜんとせず其れを拒否するものが、現實の吾々である。吾々は何處迄も無棍の長者子である。身に一物もつけぬ長者窮子でなくてなんであらう。

アツシシの聖者セントフランシスのやうに無棍の赤裸の身を神に捧げた心をもつて、この一糸も纏はぬ窮子はやがて長者の家に歸るであらう。しかし其れは何時の日になるか待遠し。

碧巖に描く

三〇二

碧巖に描く終

昭和十七年十月十五日初版印刷
昭和十七年十月二十日初版發行（三千部）

碧巖に描く
◎定價二圓

(出文協承認)
ア150171

著者

蓮沼文範

發行者

草村松雄

印刷者

山本禎男

配給元

日本出版配給株式會社

東京市牛込區山吹町一九八
東京市神田區淡路町二ノ九

發行所

東京市赤坂區田町七丁目三番地
龍吟社

電話赤坂(48)二五三・四〇三
振替東京七〇〇〇番
會員番號 第一四〇〇一二號

龍吟社宗教書

日蓮聖人六百五十遠忌報恩記念會編 日蓮聖人御遺文講義 全十八卷 各卷三・五〇 送料三〇〇	森大狂編纂 日本禪宗年表 四〇八頁判 定價四・八〇 送料三〇〇	山川智應著 開目抄講話 五五五頁判 定價四・五〇 送料三〇〇	山川智應著 觀心本尊抄講話 六〇〇頁判 定價五・五〇 送料三〇〇	常盤大定著 支那佛教史蹟踏查記 七三四頁判 定價二・〇〇 送料四〇〇
--	---	--	--	--

龍吟社新刊書

工學博士 伊東忠太著 日本建築の研究 上下二卷 一二四八頁 揃送料一五・〇〇	岡部教育研究室著 農村に於ける青年教育 その問題と方策 六九〇頁判 定價九・〇〇 送料三〇〇	安西周著 先哲醫話 三七四頁判 定價二・五〇 送料一五〇	日本經濟研究所編 政治經濟先人を語る 三八〇頁判 定價二・五〇 送料一五〇	同 幕末維新 三三六頁判 定價二・二五 送料一五〇	工學博士 足立康編 法隆寺再建論争史 三九〇頁判 定價三・八〇 送料二〇〇	青延春著 優生結婚の話 三四〇頁判 定價二・二五 送料一五〇
---	---	--	---	---------------------------------------	---	--

日本精神の權化聖德太子の
鑽仰と研究資料の一大集成

財團法人 聖德太子奉讃會監修

聖德太子全集 全六卷

編纂

文學博士	石田茂作	第一卷	十七條憲法
文學博士	花山信勝	第二卷	會本三經義疏
文學博士	藤原猶雪	第三卷	太子傳・上
文學博士	足立康	第四卷	太子傳・下
文學博士	坂本太郎	第五卷	太子の藝術
		第六卷	太子論文集

體裁

A5判羽二重典雅
裝、總頁三千六百
餘頁

定價

全六卷一揃
五十八圓

送料實費
分賣せず

特製本(和本)三百
部限定頒布
定價一揃百二十圓

龍吟社

43
199

終

